

FD

report

Faculty Development

2017.3 Vol.10

同志社女子大学

FDレポート 第10号 2017.3

CONTENTS

◆ 巻頭言 ◆

『FDレポート』第10号の刊行によせて 学長 加賀裕郎 ◆ 1

◆ 教育開発支援センターの設置について ◆

..... 教育開発支援センター長 大西秀之 ◆ 2

◆ 2016年度FD講習会 ◆

講演「反転授業の設計と実践～学習効果を高める授業設計の工夫～」

..... 早稲田大学人間科学学術院 向後千春 ◆ 3

◆ アクティブ・ラーニング研究会 ◆

第6回「マナビーの多角的活用～相互啓発に基づく学習の支援に向けて～」

..... 学芸学部情報メディア学科 余田義彦 ◆ 15

第7回「地域住民とのコラボによる看護OSCEの紹介」

..... 看護学部看護学科 川崎友絵、大江真人 ◆ 18

◆ 教育開発支援センター報告 ◆

ラーニング・コモンズ開設に向けて ◆ 20

3つのポリシーの策定と公表 ◆ 27

シラバス様式の改正について ―シラバスの役割の増加― ◆ 31

2017年度からの「授業に関するアンケート」について ◆ 33

FDに関する本学ホームページ紹介 ◆ 37

◆ FD活動報告(2016年度) ◆ ◆ 40

◆ 同志社女子大学教務部教育開発支援センター内規 ◆ ◆ 42



◆巻頭言◆

『FD レポート』 第10号の刊行によせて

学長 加賀 裕郎

2016年4月から、教務部内に教育開発支援センターが設置され、FD事業の新たな母体ができました。同センターの出発点は教育開発推進センターであり、そこから『FD レポート』が刊行されるようになったのは2008年3月でした。早いもので『FD レポート』も第10号を数えるまでになりました。

本学のFD事業も次第に軌道に乗ってきたようです。FD講習会、アクティブ・ラーニングやマナビーに関する研究会などが定期的に開催され、参加する先生の数も多数にのぼります。また各種研究会での各先生の試みにも、大変刺激されるものがあります。

FD講習会では、ここ二年間、早稲田大学の向後千春先生に講師をお願いしました。大変刺激的な講習で、そこで学んだことを、私もゼミで早速、応用してみました。ゼミの進捗が、これまでよりもスムーズになったと感じています。

長い大学歴史を通して、大学は教育機関ではなく学問教授機関でした。また日本の大学教員も研究志向が強いことが指摘されています。しかし近年は、大学も教育機関であるという考え方が強くなってきました。大学の教育機関化に、問題がないわけではありません。

教育学における近代教育の意義についての批判的検討によれば、「教育」には、一定のタイプの人間に向けての「規律＝訓練」的役割があったとされます。大学は長い間、学問教授機関という自己規定によって、また学問の自由という旗印の下で「規律＝訓練」化から免れてきたのですが、近年の教育機関化によって、大学もまた「規律＝訓練」機関の一翼を担うようになった可能性があります。

そうした危惧の念を抱きつつも、やはり近年のICT化、Active Learningの動向に対処しなければなりません。2017年の春学期中には今出川キャンパスに建設中の楽真館に、2018年春学期からは、京田辺キャンパスの図書館棟（聡恵館）に、ラーニング・コモンズが開設されます。どちらのラーニング・コモンズも充実した設備をもっています。現在はラーニング・コモンズの運営方法に関して鋭意、検討中です。Active Learning仕様の教室も増えました。まさに大学教育の新時代到来とすることができます。このような教育の流れは、初等教育、中等教育を含んでおり、遠からず新しいタイプの学生が大学に入学してくるでしょうし、大学教員も、そうした新しい学生に対処しなければならなくなるでしょう。

これからの大学教育では、もう一つ、大学の内部だけでなく大学の外部にある諸機関—自治体、医療機関、企業、地域社会など—との連携によって、教育研究を進めていくという試みが必要になります。隣の同志社大学で盛んなProject Based Learningなども重要になるでしょう。これからの大学では、従来型とは異なる型の教育研究が展開されるようになります。『FD レポート』が、先生たちの多様な試みを共有するためのフォーラムになることを祈ってやみません。

◆教育開発支援センターの設置について◆

教育開発支援センター長 大西 秀之

この第10号からFDレポートの刊行は、旧教育・研究推進センターより2016年度に新設置された教育開発支援センターに移管されました。教育開発支援センターは、それまで旧教育・研究推進センターによって担われていた教育に関する業務を、教務部と密に連携しながら行うことを主要な目的として設置されました。

その設置理由は、教育行政をはじめとする大学を取り巻く急激な社会状況の変動のなかで、今後ますます大学教育の改革を促す要望や義務が高まってくる、との想定に基づいています。またこのため、FDは、同センターが担当する最も重要な業務の一つと位置づけています。というのも、FDは、教育の質の確保・向上、授業評価による改善、3つのポリシーの策定と運用など、近年、大学に対して求められている事案に対応し、その実現の中核になるものにほかならないからです。そういった意味で、FDの役割と重要性は、個別授業の改善という既存の目的から、大学内外における責務をターゲットとしたものに移行すると予想されます。

上記のような目的と理念の下、新設された教育開発支援センターは、現在、FDに関連する講習会や報告をはじめとして、授業アンケートの実施と分析さらにその活用、アクティブ・ラーニングの推進、ラーニング・コモンズの開設及び運営などの業務に当たっています。これらの業務は、いうまでもなく学生教育に直接関連するものです。このため、教務部と密接な関係性を構築し、協力・連携して業務を遂行して行くことが必須となります。むしろ、同センターが担当する業務は、教務部の業務から明確に区分できるものではなく、相互に不可分に一体化しているものがほとんどである、といっても過言ではありません。

それゆえ、教育開発支援センターの運営委員会は、現在、教務部長が委員長となり6学部11学科の全教務主任が委員として参加して審議する、という構成となっています。詳細に関しましては、本誌に掲載いたしました「同志社女子大学教務部教育開発支援センター内規」を御一読いただければ幸いです。なお繰り返しにはなりますが、こうした組織構成は、ひとえに教育開発支援センターが担う業務が教務部と連動するものであるからにほかなりません。またこのことは、大学の内外から現在求められている「改革」が、事務組織や経営などといった表面的な側面にとどまるものではなく、大学の存在意義である「教育」を基盤とした抜本的なものであることを改めて認識させられる、極めて示唆的な状況といえるでしょう。

以上のように、FDレポートの刊行が教育開発支援センターに移管されたこと、また併せて同センターの設立の経緯と目的、その業務などの概要を説明させていただきました。本誌は、同センターの活動実績にほかなりませんが、ここでは本年度の他の活動内容の概要とその目的を提示させていただきます。

本年度の活動として、まず次年度9月に開設を目指して現在建設が進められている今出川キャンパスと、2018年度4月の開設を計画している京田辺キャンパスそれぞれのラーニング・コモンズの設置計画を進めています。ラーニング・コモンズは、施設や設備などのハード面も重要ですが、それ以上に学生の学びに如何に繋げ促進させることができるかが主要な目的となります。このため、どれほど立派なハードを造ったとしても、それを教育の場として管理・運営して行くことが必須となります。こうした意識の下、教務部をはじめとする関係部署と連携し、ラーニング・コモンズをより有効に活用するための組織整備や運営計画などを進めています。

次に行った活動は、FD講習会とアクティブ・ラーニング研究会の開催です。これは旧教育・研究推進センターから引き継いだ業務ですが、前述した大学改革に関連するFDの役割を強く意識して行う所存です。その一環として、学内の企画の充実のみならず、学外で開催されるFD関連企画の情報を教職員に積極的に発信し、その参加を促すことも試みています。またその成果は、FDレポートをはじめ教育開発支援センターのホームページなどで発信し、大学全体で共有できるように努めたいと考えています。

また今後の重要な業務として、授業アンケートの改定があげられます。主要な目的としては、既存の授業改善に加え、大学全体として教育の質の確保と向上につなげ、さらには成果の学生への還元や社会に対する発信なども視野に入れています。いうまでもなく、こうした改定の目的は、教育を中核とした大学「改革」の推進を意識したものです。

これらのほかにも、同センターでは、シラバスの改定など教務部と連携した業務を推進しています。むろん、その目的は、教育の改善を通して、社会の要請に応える大学のあり方を模索することにあります。その一環として、新たに教育開発支援センターから、刊行となりました、本誌FDレポート第10号を御一読いただければ幸いです。

◆2016年度 FD 講習会◆

日時：2016年10月19日（水）16：00～17：30

場所：京田辺キャンパス 知徳館 C464 教室

司会：大西 秀之 教育開発支援センター長

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 1 開会の辞 | 加賀 裕郎 学長 |
| 2 テーマ | 「反転授業の設計と実践 ～学習効果を高める授業設計の工夫～」 |
| 3 講演講師 | 向後 千春 氏
(早稲田大学 人間科学学術院 教授) |
| 4 質疑応答 | |
| 5 閉会の辞 | 鈴木 健司 教務部長 |

講演「反転授業の設計と実践 ～学習効果を高める授業設計の工夫～」

早稲田大学 人間科学学術院 向後 千春

向後先生 皆さん、こんにちは。早稲田大学の向後です。よろしくお願いします。今日は反転授業のお話をしたいと思います。

■反転授業とはどんな授業か

「反転授業」というのはどのようなことかという話ですが、今までは対面授業をやってから宿題を出すという形でした。皆さんも宿題を出されるかもしれません。しかし、大抵の学生は、宿題をやりません。それならば宿題はやめよう、と。

そうでなく、あらかじめ予習をしてきてもらって、それを教室の授業の中で実習してもらおうという形で、反転させましょうというわけです。今までは復習タイプの授業が多かったけれども、これからは予習をやってきてもらって、それを実際の教室内で定着させるという形をとります。これが、復習型から予習型に反転させるという意味で、「反転授業」という名前がつけられることになりました。

これは、アメリカで物理を教えている先生が最初に始めました。教室の中で、実験のようなものはおもしろいけれども、先生が話をしだすと、学生がなかなか聞いてくれないし、集中力も続かないということがあります。そこで、話をするという部分をできるだけ圧縮したいのです。話を聞かせる代わりに、その時間で学生・生徒がいろいろな実習をやって、その中で学んでいく時間にしたいと考えたわけです。

先生の話を短くするためには、先生の話とレクチャーをあらかじめ学生に聞いてもらえばいいわけです。今はYouTubeもありますし、動画の配信システムがどんどん整ってきています。先生が自分をビデオに撮って、あらかじめ学生に視聴させて、そこから授業をスタートさせるのが、反転授業です。

■eラーニングの神話と対面授業の神話

さて、eラーニングについてよく言われることがあります。eラーニングはドロップアウトしやすいということです。eラーニングを使うと、学生が簡単にさばれるとよく言われます。しかし、必ずしもそうではありません。eラーニングをやるにあたって、ドロップしにくいような工夫をする、それから、さばれないような工夫をすることは可能です。それは、これからお話を順次していきたいと思います。

授業の中でレクチャーを少なくすると、実習授業、それからグループワークもやりやすくなるわけですが、対面授業の神話ということもあります。それは、単にグループワークをさせれば効果的であるとか、グループワークは学生の自発性を促すということです。



これも、必ずしもそうではない。単にグループを作って、「話してください」と指示するだけでは、がちがちになってしまいます。学生のほうからすると、いろいろなことを話せて楽しかったけれども、学んだことは何かという思い出せない、というような形になってしまうことがよくあります。つまり、効率の悪い授業になっているわけです。ですから、どのような授業でもグループワークをさせればうまくいくということも神話です。

対面授業の中でグループワークをどのように設計していけば、実のあるグループワークで、しかもおもしろくて、実際に身につくようになるのかということも、このあとで考えていきたいと思います。

■教材ビデオの作り方

反転授業をしようと思ったときに、eラーニングを作ることが、最初のハードルになると思います。どのようにeラーニングのビデオを作っていくかということ、具体的にお話ししていきたいと思います。

私が最初にeラーニングのビデオを作ったのは、2002年です。2003年に、私のいる早稲田大学人間科学部でeスクールという社会人対応の通信教育課程を開設しました。そこでは、全ての授業を、インターネットを介したeラーニングで実施して、124単位を取って学士号を授与するという形のコースでした。そのときに初めて、オンデマンド・ビデオという形で、eラーニングの教材を作り始めました。

これは、その当時の画像をスクリーンショットで撮ったものです。今はほとんど使われていませんが、プラズマ・ディスプレイにスライドを映して、その前で自分が話をするという形で収録していました。専門のカメラマンがスタジオの中に入って、収録するという形で、これはとても緊張しました。今では、このような形はお勧めしません。

■自分一人で収録する

今はどうしているかというと、非常にラフな格好で、自分の研究室で撮っています。パソコン一台あれば、自分一人で撮れます。講師の顔とスライドを合成してくれるソフトウェアが安価に買えますので、それを使って撮っています。

自分一人で収録すると、まったく緊張しません。自分一人なので、どれほどつかえても、どれほどかんでも、言うことを忘れても、まったく問題はありませぬ。収録していくうちに、だんだん慣れていきます。ミスをした後に、編集でカバーできるのですが、もう編集すらしなくなります。

これは放送番組ではないので、自分が自分のペースで、自分の好きなように語れば、それが一番良い教材ビデオになるのだということを、言いたいのです。

放送番組ではないので、シナリオを書く必要はありません。シナリオ原稿を書くと、つかえます。私は、プロモーション用のビデオを何回か撮ったことがありますが、これはきちんとシナリオがあって、セリフが書いてあるのです。その通りに言わなければいけないと思うと、間違えます。これで何回も何回も失敗しています。

ですので、eラーニングの場合、シナリオは作りません。話すべき内容はすべてスライドの中にあるので、それを見ながら話せばいいのです。

ちなみに、私が使っているソフトは、カムタジア（Camtasia）という、アメリカのテックスミス（TechSmith）という会社のソフトですが、これは2万円から3万円ぐらいで、研究費で買えると思いますので、ぜひ使ってみていただきたいと思います。

このような形でビデオを撮ったら、大学のLMSがあれば、そこにアップロードします。同志社女子大学ですと「マナビー」というLMSが使えるということですが、早稲田大学では「コースナビ」という全学共通のLMSがあります。そこにアップロードして配信します。

もし大学のLMSが使えなければ、YouTubeを使えば問題はありませぬ。もし学生以外の人には見られたくないのであれば、暗号URLを指定すれば、そのURLを知っている人だけが視聴できます。

■クイズをつける

eラーニングを作るときのポイントは、クイズをつけることです。LMSの中にクイズを入れておけば、自動採点できます。ビデオの中にクイズを入れておいて、「答えはLMSに投稿してください。それは自動採点されますので、自分で確認してください」という形にしておきます。

最初に言ったように、ビデオの視聴はさぼってしまう可能性があるので、ビデオの中にこのようなクイズをちょこちょこ入れておいて、そのビデオを見ないとクイズがきちんと解けないような形にしておくといいです。

私のクイズも、内容としては簡単で、100点を取らせるためのクイズなのです。ただし、仕掛けをしておいて、

ビデオを見ないでクイズだけを解こうと思うと、間違えるようになっていきます。つまり、常識的な考えで正解だと思うものが、バツになるように作ってあります。ですから、これはビデオを見ないときちんとクイズが解けないぞ、ということを経験してもらおうと、それ以降は全部ビデオを見てくれるようになります。

■対面授業につながるような課題を出す

それからもう一つは、対面授業につながるような課題を出しておきます。対面授業ではもうレクチャーをしなくていいので、すぐに実習を始めるわけですが、そのときの始まり方として、「では、ビデオでやったこの予習の問題からスタートしましょう」という形にすると、非常につながりがよくなります。つまり、学生たちが自分でビデオを見てきたことが、意味があること、単にこれは予習だけでなく、教室の中でやる実習につながる課題だったのだということを確認してもらおうという意味で、つながりをつけたいのです。このようにすることでビデオの価値も高まります。

私は教え方の授業を担当していますので、たとえば、「認知機能のインストラクションのための独習用教材を作ってください。それを実際にやってみて、その報告と考察を、ショート・レポートですね、400字以内で書いてください」という予習課題を出します。そのあとの対面授業では、報告と考察を400字以内で書いてもらったものが、それぞれの学生の手元にあります。それをグループの中でお互いに発表しながら進めていくという取っかかりの課題として使うことができます。

■eラーニングの作り方のまとめ

ということで、eラーニングの中心になる、ビデオの作り方をご説明しました。ポイントは、収録は個人のパソコンで可能なので、ぜひそれを体験していただきたいということです。それから、配信チャンネルは、大学のLMSがあればもちろんそれを使いますが、YouTubeなどを活用することもできます。それから、クイズと課題をつけるということが、ポイントになります。聞きっ放しにさせないということです。

なお、私の場合は、LMSにもアップロードしますが、YouTubeにも同時並行でアップロードしてあります。というのは、最近の学生さんはスマホで全部ビデオを見ます。LMSがスマホ対応になっていない場合もあると思うので、その場合はスマホでも見ることができるYouTubeが便利です。

それから、YouTubeにアップロードしておく、自分の授業が安定して、2、3年ぐらいたった後に、公開が簡単にできます。そのような形で、「これは同志社女子大学の授業です」というクレジット付きで公開されていると、大学の宣伝にもなりますし、「この大学には、このような先生がいるのだ」という広報にもなると思います。

それから、収録の方法ですが、個人のパソコンで可能ですからぜひやっていただきたいということと、個人のパソコンでやるときも、自分の好きなことを、自分のペースで話せる喜びをぜひ味わっていただきたいです。基本的に、大学教員は、おしゃべりで、自分の話をしたいのではないですか。けれども、一部の学生は私語をしていたり、スマホをいじっていたり、寝ていたりしていて、教員からはそのような人がすごく目につくんですね。教員は話をしていて、自分で楽しいし、学生も喜んで聞いてくれると思っているわけですが、一部にそのような人がいると、とても気になります。しかし、パソコンに向かって話をすると、自分の思う通りに話せます。この喜びを、皆さんにも味わっていただきたいです。

自分が楽しんで、ビデオに収録して、それを見てもらいたいのです。そのような楽しさが伝わると、学生も喜んで見てくれます。ですから、つまらなそうに話すのではなくて、とてもおもしろい話をしているのだという雰囲気伝わると良いです。ぜひそれを体験していただきたいと思っています。

それから、ビデオ収録するときには、話を15分以内で切ることが非常に重要です。よく、eラーニングのビデオでも、1時間以上区切りなく話していることがあります。これは絶対にだめです。15分以内で切りましょう。15分単位で切って、それを4セクションぐらいでちょうど1時間に収まりますので、一つの授業内容にします。

大学の授業一コマ分である90分の授業をビデオで収録すると、大体60分で収まります。縮まった分の30分は何かというと、最初のガヤガヤしたところや、「ちょっと、そこうるさいよ」というような注意をしている時間です。ということで、90分の授業内容は、eラーニングでは60分で収まりますので、それを4分割して、15分×4セクションという形で切っていくと良いeラーニング用のビデオができます。

■グループワーク「自分の授業ビデオを作るとしたら」

それでは、グループワークをやしましょう。皆さん方がもし自分の授業ビデオを作るとしたら、どのようなもの

にしたいですか、ということを考えていただいて、グループ・ディスカッションをしていきたいと思います。それでは最初に2分ぐらい考える時間を差し上げますので、考えていただいて、ポストイットにメモしておいてください。その後、1人1分で、グループ内で発表していきたいと思います。では、お願いします。

～グループワーク①～



向後先生 はい、ありがとうございました。それでは、せっかくですので、どこかグループを指名して、発表していただきたいと思います。今日はグループが多いので、二つサイコロを同時に振りますので、オレンジのほうが行とします。(サイコロを振る) はい、10列めの2番めです。では、順番にお1人ずつお願いします。

川田先生 これほどたくさんいるのに、アンラッキーな日で、当たってしまいました。情報メディア学科の川田と申します。とても参考になると思って、お話を聞かせていただきました。情報ビジネス起業論という授業で財務諸表を教えるのですが、損益計算書など割と簡単なのですが、分かってくれないので、授業で何回も説明する時間があったいなと思っています。財務諸表だけを、簡単に解説をこのような動画にしておいたらいいのではないかと、ぜひ来年からしたいと思っています。

向後先生 はい、ありがとうございます。では、2番めの方、お願いします。

川崎先生 薬学部で川崎といいます。当たると分かっていたらもう少し違うもの考えたのですが、ここで発表したものをそのまま言うと、授業で流せばそれで講義の代わりになるようなものを作るのいいのではないかと思います。そして15分間、15分、15分、15分と用意しておいて、ここで毎回15分流して、その間、学生は聞いていて、私は座っています。そして適当に質問などがあつたら、毎年同じもので済むし、先生がおっしゃっていた、反転授業ができるという、まさにそれが実践できるのではないかと思います。以上です。

向後先生 はい、ありがとうございます。では、3人め、お願いします。

野々口先生 看護学部の実習助手の野々口と申します。私は授業を自分ですることがありませんので、とても悩んだのですが、演習の補助に入らせていただくときにデモを見せるときがあります。そのようなデモのビデオを撮っておいて、事前に学生に見ておいてもらおうと、演習のときにどこが難しかったかというところを確認しながらやっていけるのではないかと思います。以上です。

向後先生 はい、ありがとうございます。では、最後、お願いします。

高橋先生 日本語日本文学科の高橋です。日本語日本文学科では1年生必修の基礎リテラシーという科目があります。簡単な言語に関する調査と、レポートを書かせるのですが、高校生から上がりたてなので、情報の授業などのリテラシーは学生によってかなり差があつて、コンピュータを全然開けない子から、ワードで上手に文章を作る子もいます。そのような授業で、簡単なワードやエクセルの操作などをビデオで撮影しておいて流すと、複数の教員が担当しますが、教員によって指導の内容の差もなくなりますし、QRコードなどを配付する資料に載せておけば、すぐに自宅等でも確認できる、うまく使えるのではないかと思います。以上です。

向後先生 はい、ありがとうございます。どうもありがとうございます。今聞かせていただいたように、いろいろな形で活用ができます。特に、最初の発表の、財務諸表を毎回教えなければいけないということと、最後の発表の、パソコンの使い方など、手を動かすようなものをビデオ化すると効果的です。

■ビデオ教材を使うことの効果

先ほど紹介したカムタジアというソフトは、スライドだけでなく、パソコン画面に映っているものすべてを、自分の顔と同時に、収録します。たとえば、エクセルを開いて、このようにコピーして、このように式を入れてコピ

一して、このようにすると一発で出ますよ、というようなことを話しながら操作します。そうすると、操作している画面と自分の声が同時に録画されているので、それを後でどれくらいの大きさにレイアウトすればいいかを決めるだけで、教材ビデオができるのです。このような操作系の授業は結構あると思いますが、毎年やって、同じところで学生がつまずきます。そのようなことがなくなると思います。

ビデオ化すると、学生のほうも、1回ビデオを見ただけでそれで終わりということは、実はあまりないのです。学生の視聴記録（ログデータ）を検討してみると、普通のレクチャービデオであっても、2回から3回は見ています。一方、教員が教室で話して、学生がそれを聞き逃したといっても、もう1回同じことは話せません。しかし、eラーニングのビデオであれば、2回とか3回見てくれます。自分が聞き逃したと思ったところも、巻き戻してもう1回見てくれます。

操作系のビデオを見ながら、自分でもエクセルを開いて、練習する場合でも、何回も見えてくれますので、非常に効率が良くなります。もし、これを対面で、一斉にパソコンを広げてもらって実習するとなると、必ず、「うまくできません」「パソコンが止まりました」などということになります。ビデオを使えば、そのような非効率的なところがなくなることが期待できます。

それから、薬学部の方が「授業を全部撮っておけばいいのではないのでしょうか」ということを言われました。まさにその通りで、ぜひやっていただきたいです。私の経験から言うと、1回収録すると、3年間は使えます。基礎的な、たとえば哲学の授業であれば、10年ぐらい使えるのではないかと思います。法律を含む科目で、もし法律が変わって、その変更に合わせて内容を変えなければいけない場合でも、法律が変わるまでは使えます。

ですから、1回撮ったらその年だけで終わりではありません。通常は、3年か4年、放送大学だと4年で入れ替わりますが、大体4年ぐらい使ってもOKだと思います。同じことを毎年話すのが嫌だということであれば、絶対にビデオを撮ったほうがいいです。新しい知識や情報については、そのビデオを年ごとに追加して、古いものを削除していく形でアップデートしていけば、学生に最新の情報を提供することができます。

看護の方から、デモンストレーションビデオの提案が出ましたが、これもぜひ撮っていただきたいです。現場で、実際に体をどのように動かすのか、採血をどうやるのかなどをきちんと撮っておけば、非常に良い教材になると思います。その場合は、パソコンの前で座って話すのではなくて、実際の実習の様子を、ビデオカメラやスマホのビデオで撮ることになります。

■グループワークの設計

以上のように、eラーニングは非常に可能性があります。そうすると、eラーニングに任せることができる部分がどんどん増えてくると思います。その一方で、では教室の中でどのようにするのかという話になってくると思います。

次はグループワークです。実習系の授業やパソコンの実習はもともとグループワークを使っていると思いますが、そうではない座学として設定されたような授業でも、グループワークを作っていくことを考えたいと思います。ポイントは、グループのサイズと、アイスブレイクを使うこと、それから、活動を短く区切るということです。

まず、グループワークは300人の授業でもできるということです。今、秋学期が始まりましたが、まさに私が今受け持っている授業が300人なのです。定員300人の教室に300人が来るので、もうぎぎぎですが、そこでもやはりグループワークをしています。

■グループ編成のコツ

ポイントは、5人から6人で1グループを編成するということです。最近分かったのですが、最適人数は4人です。今ここで、まさに先生方が座っているこの4人のパターンが、一番良いパターンです。これだと誰もサボる人はいません。それから、団結力が強くなります。自分が少し手を抜くと全体の戦闘力が落ちてしまいますので、4人が一番良いと思っています。最低3人であればOKです。2人でやると少し気詰まりな感じがしなくもないので、3人から4人、多くても5～6人で1グループを編成するのがいいと思います。

今日も先生方にグループで座っていただくのに、「違う学部、違う学科で」ということをお願いしました。まさにそれがキーポイントなのです。もし、「自由に座ってください」という形にすると、必ず仲の良い友達同士で座ります。グループワークをするためには、それは良くないのです。できるだけ初対面の人と一緒にしてほしいのです。

そうでないと、なあなあでいってしまいますし、新しい自分を発見する機会も失われてしまいます。友達同士の中でやると、友達が知っている自分を演じてしまいます。そうすると、新しい自分を発見する機会がなくなってし

まって、グループワークの魅力が半減してしまいます。常に新鮮な気持ちでグループワークをやりたいのです。

私の場合は、学年、性別をランダムにしてグループを編成して、席を指定します。300人であろうが、席指定です。後で少し紹介できると思いますが、大福帳という、A4版の大きな出席カードを使っています。前の週にあらかじめ、「32班」「12班」などのように、数字を書きこみます。教室では、学生は自分の大福帳を受け取って、指定されている番号の席に座ります。

私の授業は、1年生から4年生まで自由に取れる授業ですので、できるだけ、別々の学年、それから性別も半々ぐらいでグループを組んでいきます。人間科学部は、男女比が6：4ぐらいです。ですので、男女半々ぐらいグループを組むことができます。ここがポイントで、全員女性とか全員男性になると、なぜかあまりうまくいかないの、男性、女性で半々にします。これは意図的にやっています。だから、学生さんから、「この授業は、出会い系授業です」と言われるようになってしまいました。出会いの機会も大切だと思っています。

■アイスブレイクでスピーチのトレーニングをする

実習に入る前に、アイスブレイクをやります。遅刻してくる学生がいるので、最初の15分ぐらいまではアイスブレイクをやって、本題にはまだ入らないという形にしています。

アイスブレイクのテーマはいろいろです。たとえば「マイ・ブーム」。「最近自分がはまっていることについて、1分間で話してください」ということをやります。

「アイスブレイク集」の本も出ていますので、そこから好きなものを取っていけばいいと思います。たとえば、「私の秘密を三つ言います」と言って話してもらって、そのうち二つは嘘で、聞いている人はどれが本当の秘密なのかを当てるゲームなど、おもしろいアイスブレイクになると思います。

また、1分間スピーチをして、毎回お題を変えていくようにすると思います。私は、たまにゲームも入れますが、大体は1分間スピーチをやってもらっています。そのときに、「これは就活のためだ」と明言します。突然割り当てられたテーマについて1分間で話することができる能力は、面接のときにすごく強みになります。そのために、これはとても良いトレーニングなのです。

4年生はもう就活は終わっていますが、1年生、2年生、3年生にとっては良い練習になるので、毎回お題を出して、1分間スピーチをやってもらっています。たとえば、就活向けのお題として、「人間科学とは何か」というテーマを出します。このテーマは、私がいるところが人間科学部という学部なので、必ず就活の面接のときに聞かれるのです。

そのために、あらかじめ学生からリサーチしていて、面接のときにどのようなことを聞かれたのか、お題を蓄えておきます。アイスブレイクのときに、このような形で練習をしてもらうことにしています。このように、正解のないテーマでスピーチをやってもらうことは、とても良いトレーニングになります。

■具体的な実習課題を設定する

それから、具体的な実習課題を設定するということで、これは心理学の実習ですが、「ハノイの塔」というパズルです。これも実際に手を動かしてやるのが非常に重要なので、このような小道具を、折に触れて集めておくことが大事です。このパズルはダイソーで、100円で売っていたのですが（もう今は売っていないかもしれません）、50セットぐらい買い集めたものです。

このような小道具を使って、グループワークを進めるといいと思います。そのときも、フリーライダー（タダ乗り）の人を作らないように、役割を分担してもらいます。

ハノイの塔のパズルを解く人と、それを観察する人、それを記録する人、アドバイスをする人などと役割を決めてもらって、分担して進めていきます。

固定机でも可能です。前の列の人が後ろを向くので、姿勢的には少しきついです。固定机でも可能です。場合によっては、このような通路側などのスペースを利用して、体を動かしてやってもらうこともあります。



■グループ同士でプレゼンをする

グループの中でいろいろな話をしてもらうことが基本形ですが、話をしたら必ずそれを発表するという課題をつけています。ただすべてのグループに、前に出てプレゼンテーションしてもらうと、それだけで時間がかかってし

まいます。ですので、グループ同士でマッチングしてペアを作ってもらって、まず1班の人が2班の人にプレゼンテーションして、そのあと、2班の人が1班の人にプレゼンテーションするという形で、練習してもらいます。

プレゼンテーションをするときに何もしないでやるのは難しいので、A3版の厚紙に発表したいことを書いてもらって、まとめてもらいます。したがって、グループ・ディスカッションのときは、この紙にまとめてもらう作業が入ります。

実際のプレゼン・チャートは、このような形でやります。これは、「2分間スピーチの教育ゴール」ということで、書いてもらったものです。右側の「38」というのは、グループの番号です。その下に隠してあるのは、38班の人の名前です。

このような紙を使うことで、全員の視線が集まりますので、非常に団結力が増します。誰も、サボる感じはしません。みんな、このプレゼン用のチャートに視線が集まって、集中的に話ができます。

■ひとつの活動の時間は短く区切る

ひとつの活動の時間は短く区切ることが大事です。たとえば、「20分あげるの、グループの中で話して、後でプレゼンしてもらいます」というような形にするのは良くありません。20分間というのは、どう考えても長過ぎます。最初の3分間はきちんとやりますが、残りの17分間は、がやがやするだけになってしまいます。

ひとつの活動はできるだけ短くして、10分以下に抑えることが大事です。ですから、先ほど皆さんにやってもらったものも、「2分間で考えをまとめて、メモしてください。その後、1人1分で回します」という形にしました。これくらいのスピード感でやらないと、集中力は続きません。ですので、タイマーを使って、きちんとマネジメントすることが大事です。

そのときにキッチンタイマーを使うのですが、書画カメラを使って、タイマーを大写しにします。そうすると、こちらが「あと残り時間3分です」といちいち言わなくても、スクリーンに提示されていますので、学生自身で、「あと何分だから急ごう」という形で、チームワークを発揮してもらえます。

■全員の前でプレゼンテーションをする

授業の最終回に近い頃になると、サイコロでグループを選んで、全員の学生の前でプレゼンテーションをしてもらいます。1分間のプレゼンテーションです。プレゼン用に作ったA3判厚紙のチャートを書画カメラに映して、1分間話してもらいます。

これは、当たった学生にとっては、非常にインパクトのある体験です。100人、200人いる教室の中で、自分1人で、1分間という短い時間ではありますが、きちんとプレゼンテーションをするという体験をするわけです。もちろん全員ではなく、たまたまサイコロで当たった学生だけの体験ですが、自分がもしあの場に立ったらどうだろうというシミュレーションをしてもらう機会になっていると思います。

■グループワークの設計のまとめ

では、グループワークのまとめです。グループの定員は、経験上、5プラスマイナス1が最適ということで、4人から、多くても6人までです。少なくとも3人いれば可能です。グループの編成は、学年・性別を混ぜて作り、あらかじめ席を指定します。

グループの活動は短く区切るのがポイントで、なるべく10分以下に設定して、何をして、どういう成果物にするのかということを明快に指示していきます。ただ単に、「グループの中で話し合ってください」という指示を行うと、必ず失敗します。そうではなく、「これについてこのような話をして、これでまとめてください」という形で指示をします。

このようにきっちりと時間を切ったり、やる活動を制約したりすることが、学生の自主性を損なうのではないと思われる先生もいると思います。しかし、実際にやってみると分かるのですが、できるだけ制約したほうが、学生は逆に自由になれます。「20分間与えるから、やってください」と言うと、まず、誰がリーダーシップを取るかで、もめます。ある学生はやる気がないから、そのまま終わってしまいます。グループの中の雰囲気が悪くなって、だめになってしまいます。

ですから、こちらがきちんと指示することが大事です。「これからグループワークをやります。ジャンケンをして、まずリーダーを決めてください」と指示して、「それから5分以内にこれをやってください。残りの時間で、まとめてください」というように、できるだけ制約をかけます。そうすると学生は、誰がやるのか、どのような役割を

するのかということを決める時間を使わずに、本題のテーマについて考える時間ができるのです。

先生の役割は、学生の活動を目的に沿って、できるだけ制約することです。考えてもらう内容は、学生の自由になります。このように考えてグループワークの設計をやっていただきたいと思います。



■グループワーク「グループワーク形式を使うとしたら」

ではここで、2回めのグループワークにいきたいと思います。「もし、皆さんが自分の授業の中でグループワークの形式を使うとしたら、どのようなものにしたいですか」ということを考えていただいて、先ほどと同じように、シェアしていきたいと思います。次は、ブルーのポストイットです。では、2分間で考えをまとめていただいて、書いてください。

～グループワーク②～

向後先生 はい、どうもありがとうございました。それでは、またサイコロを振っていききたいと思います。（サイコロを振る）8の8。一番後ろのこちらから8列め。では、お1人ずつお願いします。

小崎先生 聖書などを担当しています、小崎と申します。

私は、聖書の物語をグループの中で役割を決めてやった後、この物語にはどのような続きがあるかということを生徒同士で話し合ったり、その部分を考えているということを言いました。

それからもう一つは、命のこと、倫理のようなことも授業でやりますが、ディベートのようにして、たとえば、がんの告知をすべきかどうか、安楽死を認めるか認めないかということ、それぞれの立場に立って、いろいろな意見を出し合って、考えるようなことをしてみたいと思っています。以上です。

向後先生 はい、ありがとうございます。

中川先生 皆さん、こんにちは。教職課程センターの中川と申します。

私の授業は、教育カウンセリングの授業のことを言いました。不登校やいじめの問題がありますので、立場を決めて、いじめられている子と、いじめる子のロールプレーをします。それを反転させて、逆の立場でやります。それを見ている人はどのように感じるかということ、グループでやります。

もうひとつ言いますと、それに関わるような教育自治的な記事を、1週間以内という中で一応持ってきて、そのときのタイムリーな話題について、ディベートをしております。以上です。

向後先生 はい、ありがとうございます。

成橋先生 薬学部の成橋と申します。薬学部ではすでにこのようなグループワークを実習でやっているの、実践していることを申し上げました。

何らかの形のシナリオを、学生に渡します。医療に関わるシナリオ、そのようなものを渡して、まず、問題がどこにあるか、問題を抽出してもらいます。抽出してもらったその問題をどう解決するかということ、グループワークとして調べてもらう、考えてもらったらいと思っています。

あと、ロールプレーとしても、患者役、薬剤師役とそれぞれ分けて、それをお互いに何らかの課題を与えて、ロールプレーをしてもらったらいと思っています。

向後先生 はい、ありがとうございます。

塘先生 現代こども学科の塘です。発達心理学などを教えています。2点お話しします。

一つは現代こども学科の宣伝といえますか、現代こども学科の教職実践演習というものがあります。教職を取らなければいけない学生は取っているものですが、そこで、教育実習や保育実習の体験、それから、「マイネカルテ」というものを、現代こども学科では膨大なものを書いています。学びの履歴と言われるものですが、それをグループの中で共有化して、具体を抽象化して、さらにプレゼンをさせます。1分間でプレゼンさせるというようなこと

を、本当に日常的にやっています。そうすると、その中で、学生たちは、自分たちのばらばらの体験を、どうやって共有化して抽象化していくかというようなスキルが身についていきます。

2点目は、私の授業でやっていますが、ロールプレーをやっています。特別支援が必要なこどもたちに対してどのようにするかという宿題を出しておいて、グループで考えさせて、それを発表させるというようなものです。そこで大事なことは、先生の役をする学生は大事ですが、もっと大事なものは、こどもの役をする学生です。こどもの視点から、どのような支援をされたいかというようなことを体験化させて、話し合わせるという授業をしています。以上です。

向後先生 はい、ありがとうございます。皆さん、授業の中で、このようなグループワーク型の授業をされているので、非常にバリエーションのある提案が出ました。ディバート、それからロールプレー、それからシナリオ・ベースのもの、それから記事などを使う事例ベースのもの、このような形で材料を集めてきて、さまざまな形式のグループワークができますので、ぜひ皆さん方の授業の内容に合った形の実習を、自分で作り上げていただきたいと思います。

私も時々ロールプレーをやりますが、ロールプレーは非常に疲れます。見ているほうも疲れるし、やっているほうも疲れますが、そこに対するフィードバックが大切です。学生に、ディバートならディバート、ロールプレーならロールプレー、シナリオ・ベースで問題解決するなら問題解決させるわけですが、その中に何らかのフィードバックを入れることが必要です。やりっぱなしではなくて、どのような点が良かったか、どのような点は改善すべきかということを、先生1人だけではなくて、TAも入れて、ファシリテーターという形で入ってもらって、フィードバックしていくほうがいいと思います。

それから、私の場合は、このようなグループワークをしもらった後は、必ずショート・レポートを書いてもらっています。それは、グループで一つの作品を出すというわけではなくて、終わった後で、個別にショート・レポートを書いてもらいます。今回の授業でやったグループワークは、あなたにとってどのような意味があったのか、あるいは、あなたはどのようなことを学んだのかということを、300字でも400字でもいいので、言葉にしてもらうことが大事かと思います。それは個別の成績をつけるときにも使いますし、それから、個人で、自分で内省して、自分にとって今回のワークはどのような意味があったのか、振り返る機会にもなると思います。

■大福帳とは

ということで、早いもので、あと10分になってしまいました。この時間を使って、補足的な話をしたいと思います。

まず、大福帳ですが、これは三重大大学の織田揮準先生という方が発案されたもので、普通ですと短冊型の出席カードのようなものを使いますが、それをまとめて、A4版の裏表、全15週ありますので、15回分、全部印刷してしまうという形です。このような形で、授業が終わると、授業の感想を自由に書いてもらっています。それが、出席の証です。

これのどこがいいかというと、代返ができません。2人分の感想を書くことはほとんど不可能です。それから、皆勤賞を目指すという、良い目標ができます。どこかで欠席してしまうとその欄が空欄になってしまいますので、なるべく出席しようという意欲が湧きます。

右側の欄に、先生からの返事が書けるようになっていきます。300人分を書くと、大体5時間かかります。私は、申し訳ないのですが、TAの方に書いてもらっています。前に、「読みました」判子を作ったのですが、不評でした。ですので、大福帳をやるのであれば、返事を書く覚悟をした方がいいです。織田先生も、全部返事を書いていますと言っていました。

■ビデオ収録の副産物

それから、ビデオを作っていくと、非常に良い副産物があります。最初の年はスライドを使ってレクチャーを収録するわけですが、その次の年には、それを文字起こししてもらいます。そうすると、何となくテキストのようなものができます。画像なども、画面からキャプチャーして貼り付けていくと、感じの良いテキストができます。自分オリジナルのテキストができます。

私の感覚だと、3年ぐらいかけて1冊のテキストができます。そのテキストを公開して、それを使えば、独習できるようにしています。ですので、授業をしゃべっただけで終わるのではなくて、それを収録することによって、こうした副産物を作っていただきたいと思います。

■ 4 コママンガを描く練習

他ではあまりやっていないと思いますが、4コママンガの練習もやったことがあります。私のゼミの卒業生に、すがやみつるさんというプロのマンガ家さんがいて、京都精華大学の教授になっています。その方がYouTubeで「4コママンガの描き方」を公開しています。それを使って、自分のキャラを作って4コママンガを作ることを、5週間の最初の授業の15分間を使ってやっていきます。そうすると、このように描くことができます。

これは何の利点があるかというと、いろいろなプレゼンテーションをするときに、自分のキャラクターを出して説得すると良い効果があるのではないかとのことなんです。もし、絵心があれば、そういうときに役立つと思います。これは非常に好評でした。

■ゼミをオンラインでシステム化する

最後に、ゼミをどのようにシステム化するかということは長年の懸案事項でした。「サイボウズ Live」という無料のグループウェアのサービスがあります。そこの掲示板を中心に使って、一人ひとり個別指導を、オンラインと、それから対面のゼミもやります。このように、オンラインと対面の両方でサポートしていくと、卒論指導も修論指導もうまくいくことが分かってきました。

では時間が来ましたので、私の話は終りにしたいと思います。

■質疑応答

司会 それでは、向後先生、あと、ご参加いただいた先生方、ありがとうございます。これから10分ほど質疑応答があります。せっかくの機会ですし、このような、まさに発表、プレゼン、われわれが学生に促しているものを体験してみて、そこから活用できないかと考える機会ですので、先生のほうから、まずフロアのほうに、何かご質問など、何かあれば投げかけていただいても結構ですし、フリーでも結構かと思いますが、どちらがよろしいでしょうか。

向後先生 では、フリーでお願いします。

司会 はい。それでは、今日の内容に関して何かご質問などおありの先生方がいらっしゃれば、挙手でお願いいたします。どなたか。はい。では、若本先生、お願いします。

■グループワークがうまくいくためには

若本先生 英語英文学科の若本です。素晴らしいお話をありがとうございました。

特にグループワークのことですが、私も大人数でグループワークをやっていますが、うまくいくところといかないところがあります。たとえば、固定すると非常にうまくいくグループと、たとえば、よく休んだり、ディスカッションがうまくいなくて崩壊するようなグループが出てくるわけですが、そのようなところで、何かアドバイスといいますか、喝を入れるとか、うまくいくような何か特効薬があったら教えていただきたいのですが、お願いします。

向後先生 ありがとうございます。提案しましたように、教員のレクチャー部分をeラーニングに回して、教室全体をグループワークで設計しようとする、グループワークがうまくいくかいかないかが死活問題です。ですので、私も200人、300人のグループワークをコントロールするときに、常に全体を巡回しながら、うまくいっていないグループがあればそれを発見して、何らかのてこ入れをします。びっくりするのは、4～5人のグループなのに、1人寝ている場合があります。4～5人のグループでやっているのによく1人で寝られるなと思いますが、そのような場合も見逃さずに、前の日に徹夜したり、そのような事情があったのでしょうか、肩をポンポンとやって起こしてあげたり、そのようなことします。

内容については、うまくいかないケースは、大体チームワークがとれていないケースが多いです。非協力的なメンバーがその中に1人でもいると、グループの雰囲気が悪くなってしまって、他の人も諦めてしまうことがあります。できるだけそのようなところに入って、TAも含めて、巡回して、うまくいくように、「協力的にやろうね」という形でやるしかないです。

それから、グループは大体、2週か3週で編成し直します。毎回編成すると大変なので、3週間やってまた新しいグループを編成します。万が一、雰囲気の悪いグループに当たってしまったとしても、3回我慢してもらって、また新しいグループでやってもらう形で許してもらおうかという、それぐらいの工夫でしょうか。

若本先生 ありがとうございます。

司会 はい、ありがとうございます。今の若本先生のように、具体的に、先生方の取り組みの中で何かあれば、ぜひ、この機会ですので、よろしくお願いします。その他、どのような質問でも結構ですので、よろしくお願いします。はい。

■ e ラーニングビデオ作成の工夫

松谷先生 ありがとうございます、情報メディア学科の松谷といいます。

私はメディア教育論という授業を担当しておりまして、実は、先週と今週は、先生の東北大学での e ラーニングとグループワークについてのネット上で見られる動画を見ながら、学生とみんな、e ラーニングといったものは、学生の皆さんにとってどのようなもので、どのような問題点があるかということ、批判的に考えてみました。そこでいろいろな意見が出ましたが、一番学生にとって心配なことは、私たちは、授業を聞いているときに、先生の顔を見ているし、また自分たちは先生に顔を見てほしいという欲求があります。それは、小学校から今までの、いわゆる対面型授業がずっと続いてきた、そこでもうなじんでしまった意見なのかもしれないけれども、僕はそれを聞きながら、確かにそうだろうな、という気もしました。e ラーニングのようなものをする、高画質になれば表情がこまやかに見えるかもしれませんが、そのような、いわゆる授業のコミュニケーションの形だと思いますが、その辺で先生はどのような工夫をされているのか、お聞きしたいと思います。

向後先生 はい、ありがとうございます。ポイントは、できるだけ楽しそうに話すことです。これも私の10年間の体験ですが、e ラーニングでは自分の顔をばっちり映します。表情も、時々手の動きも入りますが、それを、学生は、自分の家のパソコンで見るわけです。そうすると、今言われたように、先生は私のために話してくれているのだという感覚のほうが強くなってきます。だから、e ラーニングは非人間的なものであって、人間的な接触を失うのだというような批判は、逆にあまり当たらないと思います。むしろ、自分と先生が1対1になっている。ですので、大きな教室で一番後ろに座っている学生よりも、e ラーニングの方がよほど親近感があります。先生が言い間違ったり、照れたりすることもあると思いますが、むしろそのほうが親近感があっていいのではないかと思います。ですから、そのような意味でも、自分の部屋で収録することをお勧めしたいです。

それからもう一方で、教室での授業を収録して、それを、e スクール（通信教育課程）のほうで配信するパターンもあります。その場合も、実際に通信制の学生に聞いてみると、教室の中でどのような雰囲気でやっているのかが分かるので、それがまた臨場感があるということで好評だったりします。

ですから、自分だけで撮る場合と、それから実際の教室の授業を収録する場合と、両方のメリットがあるので、ぜひ両方ともやっていただきたいと思います。ポイントは、自分が楽しそうに授業をすることです。どうもありがとうございます。

司会 はい、ありがとうございます。今のような、いわゆるご批判的なもの、ないしは疑問点でも、この機会ですので、出していただければ、直接お話を聞けると思います。他にもう一つか二つぐらい、ぜひ、ご質問があれば、お受けしたいのですが。では。

■ 女性だけのグループの場合

萩本先生 看護学科の萩本と申します。

先ほどの講義の中で、性別が偏ると問題が起きることがあるので、なるべく先生は男女や学科などをミックスさせるとおっしゃっていました。うちは女子大なので、女性しかいません。それで、参考ながら、先生の感覚でいくと、女性ばかり集まったりするときにどのようなことに注意をしたらいいのかちょっと疑問に思いましたので、教えていただけたらと思います。すみません、よろしくお願いします。

向後先生 そうですね、女子大だということをすっかり忘れていて、すみません。私のところが所属する学部はた

また男女比がほぼ半々ぐらいなのでうまくいっていますが、たまたま遅刻してきたグループで、全員男で組むようなケースもまれにあります。そうすると、見てみると、雰囲気がよくないです。女性同士の場合は、これもまれにありますが、それほど雰囲気は悪くありません。協力し合うという感じですか。あと、男同士だと照れが入るのかどうか分かりませんが、微妙な感じで、協力関係を結びにくいのが見て取れるので、そのような意味で、その中に1人でも2人でも女性の方が入ると、とても雰囲気がなごむといいますか、良い感じになります。そして協力的にやってくれるので、そのような意味で、男女を混ぜるといいのではないかと思います。女性だけの場合は、全く問題ないと思います。ありがとうございます。

司会 向後先生、お気遣い、大変ありがとうございました。私の経験だと、女性だけでうまくいっているのに、なぜ男と混ぜると、という経験もあります。

あともう一つ、ご質問があれば、お受けしたいと思います。では、飯田先生、お願いします。

■ピアインストラクション

飯田先生 今日はとてもありがとうございました。私のほうから、今日は、先生方から、グループワークのやり方など、いろいろな例があってとても良かったのですが、その中でグループワークを見ていくと、いわゆるオープン型で、答えのないものがふさわしいのかなと思いました。しかしながら、われわれの授業としては、たとえば答えが一つあるものも非常に大切で、それをグループワークでやるのは難しいのかどうか、それについてはいかがでしょうか。

向後先生 はい、ありがとうございます。今日はたまたま出ませんでしたが、グループワークのパターンにはいろいろあって、ディベートやロールプレーやシナリオや事例ベースがあります。それ以外に、ピアインストラクションというものをぜひお勧めしたいです。それは、正解がある問題に使えます。

今日もクリッカー（学生用の反応ボタン）を持ってきていただいています。先生が、クイズを出します。「この1番から4番のうち、正解はどれですか」という感じです。クリッカーで、あるいは、クリッカーがなければ、挙手ですね。そうすると、1番の人が3分の1ぐらい、2番の人がまた3分の1ぐらい、という感じで、ばらばらになります。そのような、すぐに正解が分からないような、専門的な問題を出します。そうしたら、グループの中で「他の人を説得する」ということをしてもらいます。1番を選んだ人は、なぜ私が1番を選んだのかということ、他の人に対して説得します。また2番の人は、他の人に対して、自分の答えが正解だと思うので、説得します。これが、ピアインストラクションのプロセスです。

そうすると、自分が思いもよらなかったような説明を受けて、だんだん自分の答えを変えていく人がいます。10分ぐらいのそのような討議の時間を取った後で、最後にもう1回、クリッカーあるいは挙手で、「答えが変わった人はいますか」という形で、もう1回聞くわけ。その後先生が、「実はこれが正解です。なぜかという、このような原理だからです」という解説で終わるのがワンセッションのピアインストラクションです。

先生が天下り的に正解を教えるのは、あまり効果がありません。「あ、そんなもんか」で終わりなのです。けれども、クイズを出されて、自分の答えが正しいことを他の人に説得した後では、この原理は一体何なのかということについて、関心が高まるのです。その後なので、先生の話をしっかり聞いてくれることになります。このような効果があるピアインストラクションはお勧めなので、これはぜひ使っていただきたいと思います。

飯田先生 ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。ちょうど時間になりました。繰り返しになりますが、長い時間、向後先生、本当にありがとうございました。ご参加いただいた先生方、本当にありがとうございました。

◆アクティブ・ラーニング研究会◆

◇第6回アクティブ・ラーニング研究会

日 時：2016年12月14日（水）16：20～17：20

場 所：京田辺キャンパス 知徳館 C464 教室

報告者：余田 義彦先生（学芸学部情報メディア学科）

マナビーの多角的活用—相互啓発に基づく学習の支援に向けて—

学芸学部情報メディア学科 余田 義彦

はじめに

本学に授業支援システム「マナビー」が導入されて1年半が経ちました。私はマナビーをたいへん気に入っており、学部から大学院までほとんどの授業で使っています。

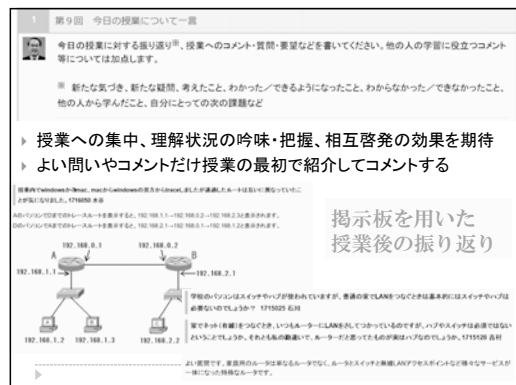
マナビーには授業支援機能がいくつか用意されています。その中で私がよく使っているのは「コンテンツ」と「スレッド」という機能です。前者はブログ感覚で作成できる授業用 Web ページです。後者は掲示板であり、授業後の振り返りや課題提出などに使わせています。他にも「コースニュース」、「小テスト」、「プロジェクト」、「レポート」などの機能を、それぞれ告知、ドリル、グループを設定しての協同学習、レポートや課題の提出用として使っています。

マナビーは様々な役立て方が可能ですが、私は学生たちに問いや考え、体験などを共有させ、互いに学びあい高めさせる学習環境として役立てたいと考えています。表題にある「相互啓発」という言葉はそのような願いを込めたものです。本稿では、私の活用事例の紹介を通して、マナビーのそのような可能性について考えてみたいと思います。

1. 問いや気づきを共有させる

「ネットワーク概論」や「情報ネットワーク」では、毎回授業の終了後に「今日の授業について一言」というスレッドを使って授業の振り返りを書かせています。それに目を通して、よい質問やコメントだけを選び出し、解説やフィードバックのコメントを添えて「今日の授業について一言へのコメント」というコンテンツに載せています。そして、次の授業の冒頭で時間をかけてその内容を紹介するようにしています。

“卒啄同機”という言葉があります。ひな鳥が卵から孵る時に、親鳥がその気配を感じ取って殻を外から小突いてやり、ひな鳥が殻を割るのを助けることを表した言葉です。最初からすべてを教えようとするのではなく、疑問や気づきが醸成されてきた段階で理解を深める解説をしてやることで“卒啄同機”の授業展開が可能になるのではないかと考えています。また、このような取組を通して、よい問い方や気づきとはどのようなものかを理解させることもできると考えています。



2. パフォーマンスアセスメントに動画を使う

「情報ネットワーク」では、ネットワーク計算のために指を折って2進数と16進数を数える方法を教え、宿題で練習させてきました。これまで翌週の授業で学生一人一人に実際にやってみさせ、できるようになっているかチェックしていたのですが、それにかかなりの時間を割いていました。そこで、できるようになった証拠動画をスマホで撮影して、それをスレッドで報告させるようにしました。その結果、チェックにかかっていた時間を大幅に短縮できるようになりました。また、他の学生の動画に刺激を受けて何度もやり直す学生が出てくるなど、相互啓発に基づく学修活動が行われるようになってきました。



3. 教室の中と外を写真で繋ぐ

教室の中だけで学ばせていると、それが実世界とどう繋がっているのかよく理解できないことがあります。「情報ネットワーク」の授業でもそうした傾向が見られるようになってきました。授業で取り上げるケーブルで繋がれたネットワークは建物の中だけのものであり、インターネットなど外部のネットワークはケーブルで繋がれていないと考える学生が出てきたのです。スマホやWi-Fiなどでワイヤレス通信を享受している彼女らからすれば、やむを得ないことかもしれません。

そこで、建物の外部では光ファイバーケーブルが多用されていることを解説してやるだけでなく、学生たちにも実際に確認させたいと考えました。そして、光ファイバーケーブルの見つけ方を教えてやり、街で見かけた写真を撮影してきてスレッドで報告させることにしました。次の授業では、それぞれが撮ってきた写真を順に見て、街中に光ファイバーケーブルが張り巡らされていることを確認しました。



4. 教室の中と外を動画で繋ぐ

教室の中だけで学ばせていると、それが実世界とどう繋がっているのかよく理解できないことがあるということを書きました。「情報ネットワーク」を学ぶことが、自分の進路にどのように結びつくのかの理解もその一つです。マナビーではコンテンツにYouTube動画を簡単に貼り付けることができます。そこで、科目の履修生が就職して行ったネットワーク系企業のYouTube採用動画を初回の授業のときに見せるようにしています。

5. 大学院の授業におけるマナビーの活用

大学院の授業で文献購読をするときには、その内容に関するYouTube動画やオープンコースウェア(※)の資料を参考資料としてコンテンツで用意しておき、参照させるようにしています。

また、「メディアリテラシー特論」では資料動画をコンテンツに載せておき、それを授業時間外に事前視聴させておき、授業ではその内容について議論するようにしていました。これは反転授業の一例と言えます。

※オープンコースウェア (OpenCourseware; OCW) 大学等で正規に提供された講義とその関連情報をインターネットを通じて無償で公開する活動



6. ゼミにおけるマナビーの活用

卒業論文・ポートフォリオの執筆・作成方法、発表方法などをコンテンツにまとめており、参照させるようにしています。また、ゼミの卒業生たちの卒業論文・ポートフォリオをPDF化してコンテンツにまとめて公開しています。

卒業論文・ポートフォリオの添削や学生相互によるチェックなどは、スレッドを使って行うようにしています。そして、最終的に完成したものをPDF化してレポート機能で提出させています。

ゼミでは毎回の終了後に、発表者だけでなくすべての学生に振り返りを書かせるようにしています。その際の振り返りは、①ゼミへの参加状況と、②気づきの内容をinsight、implication、actionに分けて回答させる方式で行わせています。



7. おわりに

冒頭でも述べたように、私はマナビーをたいへん気に入って使っています。特に気に入っている点として、以下のような特徴があげられます。

- ・ 特定の指導法を前提としておらず、自分流で自由に使える
- ・ 動画の埋め込みや画像表示、ファイル添付、URL貼り付けが簡単にできる

- ・アクセス状況を確認できる
- ・スマホでも使える
- ・授業後の振り返りに便利
- ・複数のクラスを1つのコースで運用できる（コースリンク機能）

この機能を使うと、たとえば水曜と木曜のクラスをリンクして同じコースで使うことができます。なお、開講学期が異なるクラスどうしはリンクできないので注意が必要です。

- ・教材のバックアップや再利用ができる

この機能を使うと、ゼミなどで春学期の内容を秋学期へコピーして継続利用することができます。前年度の教材（掲示板とプロジェクト以外）を新年度のコースにそのままコピーして再利用することもできます。

マナビーについて、私がまったく不満や要望をもっていないかというところではありません。しかし、今回紹介したように現時点のものでもかなりのことに役立てられます。このようなシステムでは、ない機能ばかりを求めて使おうとしないのではなく、学生たちのために今ある機能を工夫して上手に使っていくことが大切だと思います。皆さんもぜひ来年度の授業でマナビーを役立ててみてください。

◇第7回アクティブ・ラーニング研究会

日 時：2017年1月18日（水）15：45～16：45

場 所：京田辺キャンパス 知徳館 C183 教室

報告者：川崎 友絵先生、大江 真人先生（看護学部）

地域住民とのコラボによる看護 OSCE の紹介

看護学部看護学科 川崎 友絵、大江 真人



1. 看護学部を目指す教育と OSCE

同志社女子大学の理念のもと、看護学部では、「学士力と看護実践能力の育成」を目指し、看護学の専門的な知識・技術・態度を段階的な積み重ねで学ぶことができるように工夫している。なかでも、「看護実践総合演習」では1～4年次まで連動した科目として、既習の学習内容を統合して「知る」「わかる」から「実践できる」看護力の育成を目指している（岡山・眞鍋、2016）。看護 OSCE（Objective Structured Clinical Examination）はその授業の一つの柱であり、講義・演習や臨地実習を統合した学習成果を確認する機会として、全教員体制で授業を運営している。

OSCE とは、判断力、技術、マナーなど実践現場で必要とされる基本的な臨床技術の習得を適正に評価する方法であり、学生への優れた教育効果が期待できる（中村、2014）。1975年にイギリスで提唱されてから、わが国には1990年代に医学教育に導入された。現在では医歯学系、薬学系、獣医学系の6年制の学部で CBT（Computer Based Testing）と共に臨床実習前の共用試験として制度化されている。

看護教育における OSCE は、2000年代から導入されるようになり、看護実践能力修得に必要な学習方法の理解と応用、主体的な学修姿勢の修得であり、「育てる OSCE」として学生の成長を目指すこと（中村、2014）を目的として、一部の教育機関や科目で実施されている。したがって、共用試験としての位置づけや、全国的な活用には至っていない。

2. 本学における看護 OSCE の取り組み

本学における看護 OSCE は、学生が1年間をかけて修得した知識・技術や看護者として大切な態度を再確認すること、自らの看護実践能力の振り返りにより必要な学習を見出す契機となることを目的に学年末に実施している。

1) 看護 OSCE の実施概要

2015年度に実施した看護 OSCE は、課題提示、課題の実施、学生の振り返り、フィードバック（模擬患者、評価者）の順に行った。

看護 OSCE は、ステーションと呼ばれる病室を再現したブースである模擬病室において行われる。蒼苑館1階多目的臨床教育演習室に11ステーションを配置し、学生は、それぞれのステーションに1名ずつ分かれ、模擬患者に対して病室での看護場面を想定した課題に基づいて看護を行った。学生1名につき教員2名が評価者となり、評価項目により、判断力・技術・マナーなど実践で必要とされる基本的な看護実践能力の評価を行った。そして、課題終了後のリフレクションとして、学生が感想を述べた後に、模擬患者からのフィードバック、教員2名によるフィードバックを行った。

さらに、看護 OSCE の翌日には振り返りとして、看護 OSCE 場面を撮影した映像による振り返りと模擬患者への感謝状作成を行った。映像による看護 OSCE 場面の振り返りでは、グループ単位で、ビデオを視聴し、看護実践能力の視点から評価を行った。そして看護 OSCE で体験した内容から模擬患者への感謝の思い、今後の抱負等を記した感謝状の作成を行った。

2) 看護 OSCE 後の学生へのアンケート結果

看護 OSCE の学生へのアンケートでは、「自分の技能が発揮できた」「やってきた」は約1割、「できなかった」「あまりできなかった」は合わせて約7割と課題を十分に実施できなかったと振り返っていた。しかし、9割以上の学生が「今後の学習に役立ちそう」と回答しており、看護 OSCE を有意義な学習の機会ととらえていた。学生の自由記述では、「学



生同士での練習や振り返りでは評価が甘いことがわかった」「緊張が患者さんにも伝わっていたので、自信を持って技術をできるようにしたい」「模擬患者さんから感想を聞けて、これからの意欲につながった」等があり看護 OSCE が学習課題の気づきや学習意欲の向上につながることが示された。

3. 模擬患者の養成と看護 OSCE への参画

模擬患者とは、実際の患者と同じような症状や会話を演じる人のことであり、一定のシナリオに基づき、可能な限り模倣するよう訓練を受けた人のことである。看護 OSCE における模擬患者の特徴は、①問診や医療面接でのコミュニケーションの演習にとどまらない、②学生が行う看護援助を実際に受ける、③学生に身体を触られることである（中村、2014）。例えば、血圧の測定や車いす移乗の看護援助を受ける等、模擬患者にとって身体的・精神的な負荷がかかることがあるため、模擬患者の養成や看護 OSCE 当日も模擬患者の体調管理などの細やかな配慮を必要とする。

そして、地域住民による模擬患者の体験は、住民参加の場となること、患者体験を学べることであり、将来介護者になると活かされたり、過去に負の体験をした人は自らの体験を客観化できたりする場合がある。また、看護教育の内容や方法を知ることや学生の力を引き出す体験ができる（中村、2014）。看護学部においては、京田辺地域住民の方々に模擬患者として看護 OSCE の参画をお願いしている。

1) 模擬患者の養成

模擬患者の募集に先立ち薬学部医療薬学科の協力を得て、京田辺市の広報誌により公募し、年間を通して模擬患者の養成を行った。主な内容としては、看護 OSCE に関する説明会と勉強会、そして演技講習会（2回）、交流会を開催した。演技講習会では、シナリオに沿った演技とフィードバックの練習を行った。模擬患者2名と教員1名でグループを作り、模擬演技や質疑応答などにより、シナリオに基づいた演技や学生の意欲を高めるフィードバックの方法についてひとつひとつ確認を行った。2015年度は22名の参加協力により、看護 OSCE を行った。また、看護 OSCE 終了後の交流会では、学生の学びについて模擬患者と教員で意見交換を行った。



2) 看護 OSCE 後のアンケート結果

看護 OSCE 後に模擬患者へのアンケートを行った。模擬患者体験をすべての方が「とても良い」または「良い」と振り返っており、また9割以上の方が今後も協力の意志を示していた。自由記述では「学生は、真剣に取り組んでおり、今後の成長を楽しみにしている」「日常や普段の自分から少し離れ、緊張感を感じたり、想像力を鍛えたりできる良い機会」「大切な医療者育成に貢献できることを大変嬉しく思う」「患者の気持ちを知ることは大事で、模擬患者としての感じたことを話せるのは有意義である」等の記載があり、学生の教育に参画できたことや、患者体験をすることができたことから看護 OSCE への参加を肯定的に捉えていたと思われる。

4. おわりに

看護 OSCE は、今年度で2回目を迎える。今年度は新たに25名（全登録者数46名）の模擬患者を迎え、年度当初からシナリオ作成や、模擬患者の募集・養成に精力的に取り組んでいる。看護 OSCE が学生の看護実践能力の育成につながるように、今後も全教員が一丸となり、地域住民との共働により取り組んでいきたい。看護 OSCE の実施にあたり、ご協力くださった関係者の皆様に深謝する。

【文献】

- 岡山寧子、眞鍋えみ子(2016)：同志社と看護学教育～学士課程でいかに看護専門職を育成するのか～、同志社看護、1、1-7。
中村恵子（2014）：看護教育における OSCE の意義、中村恵子編、看護 OSCE（1版1刷）、2-35、メヂカルフレンド社、東京。

◆教育開発支援センター報告◆

◇ラーニング・コモンズ開設に向けて

1. ラーニング・コモンズとは

(キャンパスの真ん中に)

楽真館ラーニング・コモンズが今年の9月に、聡恵館ラーニング・コモンズが来年4月にそれぞれ開設されます。ラーニング・コモンズの開設を楽しみにしておられる方は多いと思います。中には「別に興味ない」とお思いの方もおられるかも知れませんが、それは「もったいない」ことです。何しろ何億というお金をかけて、しかもキャンパスの真ん中に設けられるものです。

多くの大学も相当なお金をかけてキャンパスの最も便利な場所にラーニング・コモンズを作っています。おそらくそれだけの価値のある施設だからでしょう。その背景には、教育の在り方の変化があるものと思われます。知識の量に最も価値がありそれを忠実に使うことを求められた時代から、知識をもとに前例のないことに対しても創造的に問題解決できる能力が求められる時代になってきた、そういう状況に対応する教育が必要となってきたということでしょう。

(授業とラーニング・コモンズ)

アクティブ・ラーニングの必要性が盛んに言われています。これも同様の背景から来ているものです。アクティブ・ラーニングにもいろいろあり、グループワークをしていなくても体を動かしていなくても教員と学生間に何らかの相互性があるものや学生間に何らかの相互触発性の工夫があるものはすべてアクティブ・ラーニングとすることができます。様々なアクティブ・ラーニングがある中で、ラーニング・コモンズが真価を発揮するのは、発表(プレゼンテーション)、討議(ディスカッション)、PBL、グループ制作、ロールプレイングなどのグループワークの場として使われるときでしょう。グループ学習の過程では、「多様な発想や(ときには自分と正反対の)価値観があること」、「他者に触発されて自分の考えが変化したり深められたりすること」「自分の思いどおりには行かないこと」、「自分の知識不足を思い知らされること」「協力し合わなければ達成できないものがあること」など多くのことを学びます。このような経験を重ねることでDWCLA10の力もつき、主体的に考える力とともに、問題発見・解決能力を身に付けていくことができます。教育におけるこのような方法は、現代におけるリベラル・アーツ教育の1つの在り方だと言っていいでしょう。

ラーニング・コモンズはこのような教育上の必要性から生まれてきたものです。つまり、ラーニング・コモンズは、教室で行われているアクティブ・ラーニングをいっそう活性化するためのものであり、教室の延長線上の装置です。逆から言えば、ラーニング・コモンズは授業/教室とは別のものや異次元のものではありません。教室で行っていないアクティブ・ラーニングをラーニング・コモンズで行ってきなさい、と言っても無理な話です。ラーニング・コモンズは、教室と一体のものです。そのため、教室の整備においても可能な限り可動式の机椅子を配置すること、大きなホワイトボードを設置すること、Wi-Fi環境を増やすことなどの整備を心がけています。ラーニング・コモンズは多くの場合、授業の事前準備や事後学習のために利用されると思われますが、ゼミや演習科目でのスポット的な利用もできるようにすべきだと考えています。

(コンセプト)

今出川楽真館に関する2013年4月の「スチューデント・コモンズ(仮称)整備ワーキング・グループ(一次報告)」では、ラーニング・コモンズのキーワードとして次の6点が挙げられています。

1)「インタラクション(相互作用)とシェア(共有)」

留学生との交流や学年・学部学科を越えた学生交流を促す。ボードを利用するなどして、思いついたアイデアを学生同士でシェアする。

2)「クリエーション(創造)」

自然に集まって何かをしなくなるような面白い環境・設備を用意し、創造意欲を引き出す。

3)「プレゼンテーション」

シンポジウムや講演会など、大掛かりなプレゼンテーションを可能にするステージ機能を用意する。

4)「可視性(オープン)」

壁をできる限りガラス張りにして“見える”空間とし、見られる緊張感や人の学習行動を見聞きすることで生

まれる刺激によって、互いの学習効果を相乗的に高める。

5)「可変性（フレキシビリティ）」

可動式の机や椅子を多用して、用途が限定された固定設備をできるだけ少なくし、コモンズの環境を状況に応じて変えていく。

6)「居住性（アメニティ）」

飲食を伴ったコミュニケーションを可能にするなど、居心地の良さを感じさせる。

また、2014年7月の「京田辺キャンパスマスタープラン策定について（答申）」の中のDWCコモンズ第1期のコンセプトでは、ラーニング・コモンズの特徴として次の6点が挙げられています。

1)「教育理念が見えるもの」

本学の教育理念のうち、とりわけリベラル・アーツ、国際主義が可視化されていること。

2)「DWCLA10を実現する空間」

卒業までに身につけるべき10の力（1. 分析力、2. 思考力、3. 創造力、4. プレゼンテーション力、5. コミュニケーション力、6. リーダーシップ、7. 思いやる力、8. 変化対応力、9. 自己管理力、10. 自己実現力）の獲得を加速させるようなコモンズであること。

3)「相互に刺激しあえる空間」

学生・教職員による教育研究活動や学生の就職活動、課外活動等が、互いにその活動を刺激しあい、相乗効果により、更に大きな成果や新たなアイデア等を得ることができるような、ワクワクする学びの空間であること。

4)「アクティブ・ラーニングを支える多様な機能」

リサーチ・資料サービス、表現技術、ITサポート、プレゼンテーションスキル、ライティングスキル、その他アカデミックサポート機能を有すること。

5)「正面性がある建物」

友和館からのアプローチにおいて、ガラス張りで開放感と広がりのある建物が感動的な正面性を有し、ドラマチックな出会いを感じることができる場所であること。

6)「居心地のよい空間」

ウインクルムの庭との連続性があり、くつろぎ感が得られるような空間。複数でも一人でもリラックスできる居心地のよい空間を有する。また女子学生のニーズを汲んだ美しいトイレとパウダールームなどを配置する。

これらのキーワードやコンセプトのほとんどが生かされた形で本学のラーニング・コモンズがスタートします。まだ実現に至っていないものも引き続き検討されることになっています。

2. ラーニング・コモンズの概要

スタート時のラーニング・コモンズの概要は次のとおりです。エリアの名称や設備は若干変更されることもあります。ラーニング・コモンズはそもそも創造的空間です。用途も例示していますが、固定的に考えるのではなく、使い方を是非創造（想像）していきましょう。なお、両キャンパスのラーニング・コモンズには、全域でWi-Fiが設置されています。

○今出川：楽真館ラーニング・コモンズ

1. 特徴

楽真館ラーニング・コモンズは、教室棟の中にあり教室と一体となっているのが特徴です。学生証等による入館認証チェックはなく、まさに教室の延長線上にあります。1階中央のイベントエリア部分が吹き抜けになっているのも特徴です。

2. 各エリアの概要

イベントエリア 【一階中央】

- ・イベントエリアは2階まで吹き抜けになっているため、2階の廊下やワークショッブルームやリサーチルームから1階のイベントを見ることができます。イベントが行われなときは、グループ学習用テーブル・椅子が置かれ、グループ学習が可能なエリアとなります。
- ・マイク使用、スピーカーを使った映像・音響メディアの利用などはできますが、イベントエリアを囲む遮音壁を

設けることができないため、音量は自ずと制限されます。ただし、2階の各エリアは壁又はガラス壁で囲まれた部屋となっているため、一定の遮音がされています。また、教室への遮音のために2階廊下にもガラスの扉が設けられています。

- ・設備としては、360インチスクリーン、200インチスクリーン、プロジェクター、映像設備、マイク設備などがあり、南側に遮光のためのスクリーンも取り付けられています。ポスターセッション用パネル、可動式ホワイトボードなども用意されています。
- ・用途としては、各種プレゼンテーション（ミニ講演会、報告会、説明会、ガイダンス、講習会、プロジェクト成果発表、ゼミの発表、キャリア懇談会、各種（募集）説明会）やワークショップ、作品発表、ポスターセッション、各種イベントなどが考えられます。

グループワークエリア 【一階イベントエリアを挟んだ東西のエリア】

- ・イベントエリアの東隣のエリアには、グループ単位でアイデアをまとめる、作品をつくる、議論する、課題を仕上げるなどの目的で利用するグループワークエリアが設けられます。フレキシビリティを重視し多様な利用方法に対応できるように、グループワークエリアには固定パソコンやモニターは設けられていません。ノートパソコン等は必要に応じてサポートデスクで借りることができます。
- ・スタディールームの機能も兼ね備え、個人での学習も可能となっています。ただし、図書館のような静謐な環境はありません。
- ・高さ30～40cm程度の可動式畳も若干置かれます。
- ・イベントエリアの西隣のエリアには、インフォダイナーが置かれています。インフォダイナーとは、6人掛け対面式ベンチシートとホワイトボードに投影するための短焦点プロジェクターが天板の下に付いたテーブルとがセットとなっているものです。グループで出し合ったアイデアをすぐにパワーポイント等にまとめるのに適しています。

グローバルラウンジ 【一階中央部奥東側】

- ・国際部などが主として利用するエリアです。留学生等との交流の場としての利用が期待されています。
- ・CNN等の国際放送の視聴が可能となります。

カフェ 【一階中央部奥】

- ・長時間滞在できる、くつろげるなどのコンセプトに沿ったリラクゼーションエリアとして、カフェが設けられます。一人でもグループでも利用しやすいレイアウトを心がけています。

ワークショップルーム 【二階南西角】

- ・可動式の個人用机椅子が30席分あり、一方の壁面は全面ホワイトボード仕様になっています。各種ワークショップや少し大がかりなグループ制作などに適したスペースです。
- ・ゼミ等でのスポット的利用も予定しています。予約のない時間帯はグループ学習等に自由に利用することができます。

グループスタディールーム 【二階中央部西側】

- ・6～10名程度で利用するガラス張り遮音タイプのグループ用学習室が3室設けられています。ラーニング・コモンズの特徴である可視性を生かしながら、遮音にも配慮したスペースです。パソコンやプロジェクターが必要な場合は、サポートデスクで借りることになります。

グループスタディーブース 【二階中央部東側】

- ・スマートインフィルを利用した10数名程度で利用するグループ学習スペースが2区画設けられています。スマートインフィルとは、簡易柱と梁等で構成される組み立て式の構造体の商品名で、柱や梁にプロジェクター、スクリーン、ホワイトボードなどが取り付けられています。
- ・2区画は、可動式ホワイトボードやストリングカーテンなどで区切られているため、必要に応じて2区画を合わせて30名程度で利用可能なスペースとして使うこともできます。

リサーチルーム 【二階南東角】

- ・ラーニング・コモンズ内で唯一固定式パソコンが置かれているエリアです。

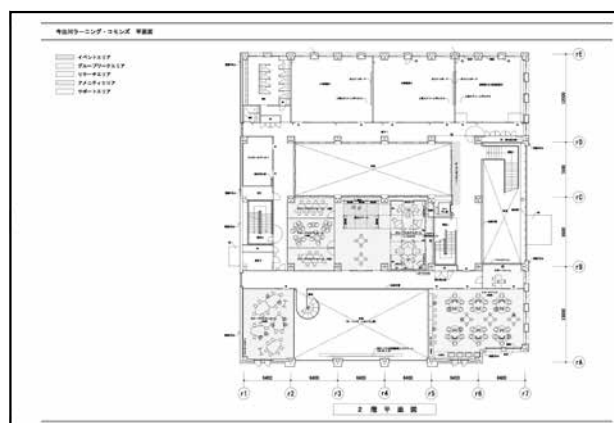
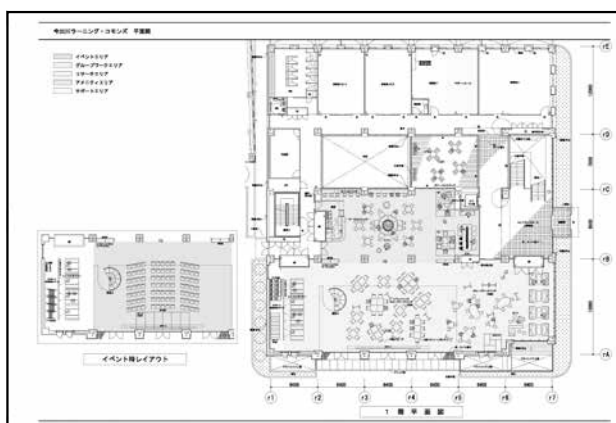
- ・情報検索など多目的な利用のためのパソコン40台、プリンター、大型プリンターなどが置かれます。情報処理学習室が増設されたという感じです。
- ・カラーでの印刷も有料で可能となる予定です。

オープンギャラリー 【二階東側廊下】

- ・廊下の一部を利用したギャラリーです。ピクチャーレールや照明機器が取り付けられています。
- ・大きな作品の展示のためには、一階のグループワークエリアなどに展示台などを適宜設けることが可能となる予定です。

LCサポートデスク 【一階北側・教職課程センターの隣及び二階リサーチルーム前】

- ・ラーニング・コモンズ全般の利用案内、利用予約受付、パソコンなどの機器類の貸出、ICT機器の利用サポート、消耗品の補充等を行います。何でもご相談ください。



○京田辺：聡恵館ラーニング・コモンズ

1. 特徴

聡恵館ラーニング・コモンズの最大の特徴は、図書館と一体型になっているということです。図書館部分との境界は一切ありません。その次に大きな特徴は、図書館と一体型のラーニング・コモンズとして、音のレベルが3段階になっているということです。すなわち、二階の図書館閲覧室は静謐なスペース、一階中央のイベントエリアは、映像・音響装置が設置され一定レベルの音までは出すことができるスペース、一階のグループワークエリア等はその中間で会話や議論等ができるスペースとなっています。イベントエリアは透明ガラスの可動式遮音壁等で囲まれ、イベント等でのそこそこの音量が、グループワークエリアでは聞こえはするが迷惑にはならない程度の音量となるよう工夫されています。なお、図書館としてのブック・ディテクション・システムは引き続き設置されますが、楽真館ラーニング・コモンズ同様、入退館認証チェックは行われません。

2. 各エリアの概要

イベントエリア 【一階東側】

- ・天井は吹き抜けではありませんが、4m 弱の天井高が確保されています。ラーニング・コモンズの内外からの可視性を重視しています。
- ・設備としては、200インチスクリーン×2、小型スクリーン3、天井吊プロジェクター×5、映像設備、マイク設備などが用意される予定です。ポスターセッション用パネル、可動式ホワイトボードなども用意されています。
- ・用途としては、各種プレゼンテーション（ミニ講演会、報告会、説明会、ガイダンス、講習会、プロジェクト成果発表、ゼミの発表、キャリア懇談会、各種（募集）説明会）やワークショップ、作品発表、ポスターセッション、各種イベントなどが考えられます。
- ・イベントが行われなときは、グループ学習用テーブル・椅子が置かれるとともに、遮音のための可動式のガラス壁が開放されるため、隣接するグループワークエリアと一体として利用できるようになります。ガラス壁を開放すると、友和館多目的スペースよりも広くなるため、大人数でのポスターセッションも可能となります。

カフェ、新聞エリア 【一階イベントエリアの北隣及び西隣】

- ・カフェとともに、「リラックスできる」「長時間滞在可能」などのラーニング・コモンスのコンセプトに沿ったスペースとし、ソファを置いたくつろげるラウンジ風の新聞エリアが設けられます。

ギャラリー

○オープンギャラリー 【新聞エリア東側】

- ・新聞エリアのソファからでも気楽に観賞できるよう、オープンタイプのギャラリーが設けられます。ピクチャーレールや照明機器が取り付けられます。

○ギャラリー 【一階最南端】

- ・現在の共同研究室を改装して、ギャラリーが設けられます。遮光や一定の静謐さを必要とする作品の展示に適しています。係員が不在のときなどには鍵をかけることもできる仕様です。その場合でも透明ガラス壁を通して作品を鑑賞することができるようになります。
- ・史料センターの特別展など、本学の歴史に関する展示も可能です。

グループワークエリア 【一階南東部分】

- ・イベントエリアの南側には、グループ単位でアイデアをまとめる、作品をつくる、議論する、課題を仕上げるなどの目的で利用するグループワークエリアが設けられます。フレキシビリティを重視し多様な利用方法に対応できるように、グループワークエリアには固定パソコンやモニターは設けられていません。ノートパソコン等は必要に応じてサポートデスクで借りることができます。スタディールームの機能も兼ね備え、個人での学習も可能です。
- ・グループワークエリア内は、さらに4つのエリアに分けることができます。自由に並び替えることができる多様な形状のテーブル・椅子だけが置かれているエリア、スマートインフィルが設置されているエリア、インフォダイナーが置かれているエリア、フローリングのみで特に何も置かれていないエリアの4つの異なったエリアでグループワークエリアは構成されています。
- ・スマートインフィルは、簡易柱と梁等で構成される組み立て式の構造体の商品名で、柱や梁にプロジェクター、スクリーン、ホワイトボードなどが取り付けられています。スマートインフィルの一部には可動式の畳が置かれます。
- ・インフォダイナーとは、6人掛け対面式ベンチシートとホワイトボードに投影するための短焦点プロジェクターが天板の下に付いたテーブルとがセットとなっているものです。グループで出し合ったアイデアをすぐにパワーポイント等にまとめるのに適しています。一部のインフォダイナーは、2階の北側にも置かれます。
- ・フローリングスペースは、模造紙を使ったポスター制作や紙工作などの工作スペースとしての利用など多目的に利用することができます。必要に応じて低いテーブルなどを置くことができますが、最初は何も置かない空間としてスタートする予定です。

グループスタディーブース 【一階南側】

- ・スマートインフィルを利用した10数名程度で利用するグループ学習スペースを3区画設けています。スマートインフィルとは、組み立て式の簡易柱と梁のみの可動式躯体の商品名で、柱や梁にプロジェクター、スクリーン、ホワイトボードなどが取り付けられます。
- ・3区画は、可動式ホワイトボードやストリングカーテンなどで区切られているため、必要に応じて大きな連続したスペースとして使うこともできます。

リサーチエリア 【一階南側奥】

- ・ラーニング・コモンス内で唯一固定式パソコンが置かれているエリアです。
- ・情報検索など多目的な利用のためのパソコン約30台、プリンターなどが置かれます。
- ・カラーでの印刷も有料で可能となる予定です。

AV ブースエリア 【総合カウンター南側】

- ・図書館に置かれている視聴覚資料を鑑賞するためのブースです。20席程度が置かれます。

グローバルラウンジ 【二階東側】

- ・国際部などが主として利用するエリアです。留学生等との交流の場としての利用が期待されています。

- ・CNN 等の国際放送の視聴が可能となります。
- ・グローバルラウンジの近くには英語学習支援室（ESSR）とイングリッシュ・チャットルームが設けられ、グローバルラウンジと一体的に利用されます。

演習室兼ワークショップルーム 【二階南東角】

- ・可動式の個人用机椅子が入った定員40人と25人の演習室2室が設けられます。壁面は全面ホワイトボード仕様になっています。ラーニング・commons（図書館内）にある教室ということができ、今までにない授業形態が生まれそうです。
- ・通常どおりの教室配当がされますが、空き時間帯には各種ワークショップなどでの利用が可能です。
- ・授業や予約のない時間帯はグループ学習などに自由に利用することができます。

グループスタディールーム

【二階中央部閲覧室内及び一階南西角】

- ・8～10名程度で利用するガラス張り遮音タイプのグループ用学習室が二階に3室設けられます。一階のグループスタディールーム2室は、既存の共同研究室をそのまま利用します。ラーニング・commonsの特徴である可視性を生かしながら、遮音にも配慮したスペースとなっています。パソコンやプロジェクターが必要な場合は、サポートデスクで借りることになります。

サポートデスク（総合カウンター） 【一階中央】

- ・現行の図書館カウンターの隣にラーニング・commonsのサポートデスクを設け、両方を合わせて総合カウンターとして運用する予定です。
- ・サポートデスクでは、ラーニング・commons全般の利用案内、利用予約受付、パソコンなどの機器類の貸出、ICT機器の利用サポート、消耗品の供給などを行います。大型プリンターの利用も可能となります。



3. ラーニング・commonsの使い方の工夫

（アカデミック・サポートについて）

楽真館、聡恵館のラーニング・commonsともに、オープン当初からICTサポートは行うものの、プレゼンテーションやライティングなどのアカデミック・インストラクターは置かない形でスタートします。その理由は、アカデミック・インストラクターを置くとこれらの指導がインストラクター任せになってしまう危険性のあることや、あるいはその反対に教室での指導と異なった指導がなされてしまう危険性があるためです。ただし、アカデミック・インストラクターを置くかどうかは、今後の状況を見て再検討することにもなっています。

（学生パワーの活用）

ラーニング・commonsの運営に学生パワーを活用している大学が多くなっています。アルバイトなどの形で運営をサポートする中で、サポートする学生も学び成長することができるからでしょう。サポート学生によるイベントやワークショップが開催されている例も多くあります。

(課外等での利用)

ラーニング・コモンズの利用は、授業に関連する利用が優先されますが、それだけに限定されるものではありません。学内の課外活動等での利用や、地域連携プログラム等での利用も歓迎です。

(ラーニング・コモンズでのイベント募集)

ラーニング・コモンズでは、いろいろなイベントを募集します。イベントやワークショップはイベントエリア以外でも、ワークショップルームやグループスタディーブースなど、いろいろなエリアを活用して開催することができます。

今秋にオープンする楽真館ラーニング・コモンズに関しては、新年度早々にイベント等の予約受け付けを開始します。いろんなイベントをオープンなスペースで行い、学生の相互啓発や意識形成につなげていきましょう。さあ、みなさん、今からどんな利用法があるか知恵を絞りましょう。

◇ 3つのポリシーの策定と公表

1. 3つのポリシーとは

(経緯)

学校教育法施行規則が改正され、2017年4月1日から大学は3つのポリシーを策定し公表することが義務付けられました。3つのポリシーは、2005年の中教審答申「我が国の高等教育の将来像」において学士課程、修士課程、博士課程ごとに教育の充実を目指す指針として言及され、2008年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」において特に学士課程の質保証の観点から大きく取り上げられました。同答申は同時に、何ができれば学士と言えるかという観点から「学士課程共通の学習成果に関する参考指針」を発表するとともに、今回のポリシー策定に際して参照することが望ましいとされている日本学術会議による「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」の制定に言及するなど今回の法令改正の考え方の出発点となっています。

(建学の精神・教育理念と3つのポリシー)

本学には建学の精神が140年に渡り受け継がれているとともに、自ら大切にしている明確な教育理念があります。これらと3つのポリシーの関連と相違点を押さえておく必要があります。

建学の精神や教育理念が明確であれば殊更に3つのポリシーはいらないようにも思えますが、3つのポリシーは文部科学省が全国の大学の教育力の底上げを狙って法令で強制しているものであり、建学の精神等とは性質が異なるものです。建学の精神や教育理念はいくら抽象的であってもその達成度が測定できないものであっても、認証評価等で指摘されることはありません。しかし、3つのポリシーは、文部科学省が大学教育の内部質保証の手段として求めているもので、ディプロマ・ポリシーにおいて大学・学部学科としての到達目標を明確にすること、カリキュラム・ポリシーにおいてその達成方法と達成度を測定・評価する方法を明らかにすることが要求されます。さらには改善に努めていることを大学が示すことを求めています。文部科学省的には、3つのポリシーは『大学としての体系的・組織的な教育活動の展開』、『学生の能動的・主体的な学修を促す取り組みの充実』、『学修成果の可視化』、『PDCA サイクルによる改善システムの確立』を実現する上で極めて重要な役割を担う指針であり、各大学は、3ポリシーに基づく体系的で組織的な大学教育を実施するとともに、点検・評価し不断の改善に取り組まなければならない、ということになります。

(3つのポリシーを積極的に捉える)

このように、ポリシーの策定とPDCA サイクルによる改善は急に降って湧いた、やらされ感があるのも事実ですが、組織的に教育を行う機関である大学として、学部学科等としての到達目標が明確であること、その達成方法を示すこと、目標の達成度がどうなっているのか達成方法が適切かなどを点検すること、求める学生像を示すことは文部科学省に言われるまでもなく、自主的に行うべきものです。3ポリシーを公表しそれらを起点としてさらなる教育力の向上を図ることは、大学として社会やステークホルダーに対する説明責任を果たすことになります。これを好機と捉えて、学修成果をいっそう積極的に広報することが望まれます。

(教育の可視化)

3つのポリシーを起点とするPDCAで求められていることをひとことで表すとすれば「教育の可視化」ということになります。研究成果は可視化しやすいものですが、教育成果はなかなか可視化することが難しいものです。大学はこれをいいことに教育の可視化に積極的ではなかった一面があったように思われます。しかし、到達目標の設定、達成方法の明示、学修成果の測定、評価方法・基準の明確化、到達目標達成度の把握、改善方法の報告、これらの過程の公表は、まさしく教育内容の可視化です。シラバスに関しても年々記入を求められる項目が増加しています。ポリシーを実践する個々の科目の中身の可視化がいっそう求められてきているということです。可視化が容易な教育成果もある一方、ユニバーサル化された大学に求められる教育においては可視化できない能力の獲得が重要になってきています。このような可視化が難しい教育成果を何とか可視化できないかという困難な取り組みもポリシーを起点とするPDCAには含まれています。

2. ディプロマ・ポリシー策定に関して留意した事項

本学では2012年度から3つのポリシーを公表していましたが、この度、中教審の3つのポリシーの策定及び運用

に関するガイドラインに従い、改めて策定し直しました。その際にディプロマ・ポリシー策定のために留意した点は以下のとおりです。

（中教審のガイドラインでの定義）

『各大学、学部・学科等の教育理念に基づき、どのような力を身に付けた者に卒業を認定し、学位を授与するかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの。』

（記述内容）

- （１）学科として学生に卒業時点で身に付けてもらいたい到達目標を率直に記述する。
- （２）社会におけるニーズを踏まえた上で、何ができるようになるかに力点を置き、学生が身に付けるべき資質・能力の目標を明確にして記述する。
- （３）実際のカリキュラムに基づいて記載する。カリキュラムに根拠のないことは記載しない。
- （４）現行のポリシー、人材養成の目的、大学案内やホームページ等の内容、履修要項記載の教育理念・目標などを参照して記述する。
- （５）達成度を測定する方法を念頭に置いて記述する。
- （６）「世界に貢献できる」などのイメージ先行の表現は用いない。
- （７）科目群名、科目名等の変わりやすい固有名詞は極力用いない。
- （８）カリキュラム改正ごとにディプロマ・ポリシーが大きく変わることはないよう、ある程度の長期間を見通した内容を記述する。
- （９）ステークホルダーに読んでもらうことを念頭に置いて記述し、分かりやすい表現とする。
- （１０）形容詞の多い抽象的表現ではなく、具体的に記述する。ただし、魅力的な内容になっているかについても留意する。
- （１１）実際に実施している（実施しようとしている）内容を記述する。
- （１２）ポリシーに書いた内容は、その達成度を何らかの方法で定量的又は定性的に測定しなければならない。

（記述形式）

- （１）全学と各制定単位のディプロマ・ポリシーの関係
 - ・全学のディプロマ・ポリシーと各学科・専攻のディプロマ・ポリシーの関係を示す文言を次のとおり統一する。
 - 「〇〇学部〇〇学科は、全学共通の学位授与方針に基づき、知識・理解、関心・意欲・態度、表現力・技能・能力に関して、次の基準に達している者に学士（〇〇）の学位を授与する。」

（２）領域区分

- ・現行の【知識】【態度】【技能】の基本的な区分法は変更せず、より分かりやすく、かつ記述しやすくするため、以下のとおり区分の文言を追加する。

【知識・理解】← 知識

知識に理解を加えることで、獲得した知識が批判的考察を経た深い理解を伴った知識であることを表現できる。原則としてインプットすべき内容をこの領域に記述する。ただし、思考力や判断力について到達目標を記述する場合はこの領域に記述する。

【関心・意欲・態度】← 態度

態度に加え、関心と意欲についても記述する。

【表現・技能・能力】← 技能

アウトプットすべき内容をこの領域で記述する。スキルに関する到達目標は技能として、コミュニケーション力、問題解決力等は能力としてここに記述する。

（記述のための語法）

- ・「学生」を省略された主語とし、原則として「理解している」「修得している」「できる」「持っている」「獲得している」「身に付けている」などを述語とする。

(到達目標のレベル)

- ・論理的には卒業生全員に求める最低基準となるが、やや厳しめの最低基準、換言すれば達成度50%程度を見込んだ目標として記述する。

(参照資料)

「現行のディプロマ・ポリシー」「大学案内記載の学科紹介」「学則記載の人材養成の目的」「履修要項記載の教育理念・目標」

3. カリキュラム・ポリシー策定に関して留意した事項

(中教審ガイドラインでの定義)

『ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するのかを定める基本的な方針。』

(記述方法等)

- ・ディプロマ・ポリシーに記載の〇〇を達成するため何々する、という書き方が基本となる。
- ・冗長な文章を避け、箇条書きが望ましい。
- ・第一読者である学生に説明するように記述する。
- ・ディプロマ・ポリシーと異なりカリキュラム・ポリシーは定期的に又はカリキュラム改正の都度見直す。

(記述内容)

- ・次の4項目に分けて記述する。

【体系性】

- ・科目区分などにより、カリキュラムの体系性（系統立っていること）について記述する。
- ・講義、演習、実験・実習等の割合（配分）やそれぞれの意義について記述する。

【教育内容】

- ・ディプロマ・ポリシーの各到達目標について、その達成のためにカリキュラム上どのようにしているか、ということを記述する。
- ・初年次教育、教養教育、キャリア教育についても記述する。
- ・社会（地域社会、国際社会、産業界等）との接続、大学院教育との接続についても記述する。
- ・関係学科等は、免許資格課程の法令を踏まえて記述する。

【教育方法】

- ・ディプロマ・ポリシー達成のために実施している教育方法を記述する。
- ・教育方法の1つとしてアクティブ・ラーニング等の主体的な学びの実践について記述する。
- ・教育環境（アクティブ・ラーニング教室、ラーニング・コモンズ等）の活用方法についてもできるだけ記述する。

【学修成果の測定方法】

- ・学生の学修成果の測定方法と評価基準の概要を記述する。測定方法は、試験、レポート、授業への参加・貢献度、学生相互評価、自己評価、ルーブリック評価など。評価基準は、最低基準をどの程度とするか、どの程度まで達成してほしいかなど。
- ・2020年度に予定されている次期認証評価報告においては、その測定結果に基づく改善状況について説明することが求められる予定である。

4. 今後の展望

(実証性)

ポリシー制定の次に来る作業は、ポリシーに書かれていることが実際に実施されていることを目に見える形で示

す作業になります。その方法としては、マトリクス形式のカリキュラムマップとディプロマ・ポリシーの到達目標を含むシラバスを作成することが一般的です。

（カリキュラムマップとシラバス）

マトリクス形式のカリキュラムマップとは、学科等ごとに作成する表形式の一覧表で、一番左の列に授業科目が縦に並び、一番上の行にはディプロマ・ポリシーの到達目標が並ぶ表です。この表により、各到達目標はどの科目で担われているかが一目で分かることになります。認証評価時には、ポリシーの実証性を説明する資料として提出を求められることが予想されます。本学では新しいポリシーに基づいて、2017年度の前半に作成する予定です。

到達目標を担う授業科目のシラバスには、その到達目標が記載されている必要があります。2017年度版のシラバス様式からは、その授業科目の到達目標を箇条書きで記載する欄が設けられました。2018年度用のシラバスの到達目標記載欄には、その科目が担うディプロマ・ポリシーの到達目標を記載することになります。このように、カリキュラムマップとシラバスでポリシーの実証性を示していくことになります。

（履修系統図）

カリキュラム・ポリシーを分かりやすく説明する資料の1つとして、履修系統図の作成が必要となります。履修系統図には定まった形式はありませんが、個々の科目が他の科目とどのように連携又は関連するのかを示すための図で、カリキュラムツリーと言われているものもその1つです。

（学修成果の可視化）

ポリシーを起点とするPDCAサイクルによる内部質保証の一環として、学修成果と成績評価基準の可視化が求められています。学修成果には可視化できるものとできないものがありますが、可視化しにくいものに関しても例えばポートフォリオなどに成果を記述して蓄積していくことなどで可視化に近い形に持って行くことが推奨されてきているほか、可視化できないものについては、例えばルーブリックによる評価をすることが推奨されています。

（成績評価基準）

2017年度のシラバスから、試験、レポート、発表、討議、授業への参加度などの成績評価方法に加えて、どの程度のレベルであればどのような成績となるかという成績評価基準を記載するようになっています。

（達成度の測定）

個々の科目の成績評価基準の明確化とともに、学科等を単位としたディプロマ・ポリシーの到達目標の達成度の測定が求められています。定量的測定方法としては、定期試験、アセスメント・テスト、外部試験、国家試験等合格率、GPA 等があり、定性的測定方法としては、ルーブリック、授業アンケートを含む各種アンケート、学習行動調査、マナビーを含む学修ポートフォリオ、面談等の方法があるようです。

到達目標の達成度を測定するために、どの到達目標にどの測定方法を用いるかを個別に確定しておく必要と、測定結果をどのように評価するかという評価基準をも明確にしておく必要があります。2018年度中にはこれらに事柄について取り組む必要があると考えています。形式的（論理的）には、到達目標の達成を分担し合っている各科目での個別学生の評価結果の集積が当該学科の到達目標の達成度となるものであるため、各科目の成績評価方法と基準について学科内で共通理解を深め共通フォーマットなどを作成することも必要なのかも知れません。

◇シラバス様式の改正について ―シラバスの役割の増加―

かつてのシラバスは、授業科目の内容をできるだけ詳しく説明することにより、学生の科目選択におけるミスマッチを防止することが主な目的となっていました。それが最近では、事前事後学習の概要を記して授業外学習の充実を促す役割や、免許・資格関係科目では、法令等に規定された内容が本当に授業で取り扱われているかどうかのチェック機能的な役割などをシラバスは持つようになってきました。成績評価のための評価方法と評価基準をシラバスに明示することも求められるようになってきました。

今般ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの制定・公表が義務化されたことにともない、シラバスにはもう1つの役割が明確に追加されました。それは、ディプロマ・ポリシーの到達目標達成のための役割です。個々の科目のシラバスには、ディプロマ・ポリシーの内のどの到達目標をどのように担うのかを明示することが求められます。シラバスは、ディプロマ・ポリシーの到達目標やカリキュラム・ポリシーの到達方法が絵に描いた餅ではなく、本当に実践されているかどうかの証明書としての役割をも担うことになりました。また、到達目標が個々の学生においてどのように達成されているかということを測定するための方法と基準を明確にするという観点から、成績評価方法と成績評価基準をいっそう明確にすることが求められています。

これらの点を踏まえて、今年度は2017年度用のシラバス記入様式と記入要領を改めました。2017年度前半には、全学的にマトリクス形式のカリキュラムマップを作って、個々の科目が担う到達目標を明確にしていく予定です。そして2018年度用のシラバスからは実際に個々の科目のシラバスにディプロマ・ポリシーの到達目標を明示していくことになります。

言うまでもなくシラバスがいくら充実しても、あるいは個々の授業でいくら努力が傾注されても、カリキュラムがバラバラで学科全体の到達目標の達成に結びつかないようであれば残念な話です。今回のポリシーの見直しにおいては、既存のカリキュラムを前提としてポリシーが組み立てられましたが、今後は必要に応じて、ポリシーの到達目標達成の観点からのカリキュラムの見直しや授業内容の一部変更も必要になってくるものと思われます。特に、ディプロマ・ポリシーの【関心・意欲・態度】に掲げられた到達目標を達成するためには、カリキュラムや授業「方法」の再検討も必要になってくることもあるものと思われます。

以下に2017年度用のシラバス記入要領の内、特に変更が加えられた【到達目標】と【成績評価方法・基準】の記入要領を掲載します。今回の変更の趣旨の理解が深まれば幸いです。

(2017年度用シラバス記入要領から抜粋)

【到達目標】

受講生に期待する到達目標を、原則として箇条書きでご記入ください。ご記入いただくに際しては、「知識・理解」などのいわゆるインプットすべき事項の概要、知識・理解を吸収あるいは活用しようとする「関心・意欲・態度」、「表現・技能・能力」などのいわゆるアウトプット能力などの観点を参考にしてご記入ください。ただし、これらの観点のすべてに関して到達目標を立てていただく必要はありません。

なお、到達目標は、成績評価基準と連動することにご留意ください。

(補足) 上記の【到達目標】の記入要領には、ディプロマ・ポリシーという文言が使用されていません。これは、2017年度用のシラバス記入要領配布時には2017年4月1日に公表するディプロマ・ポリシーが決定されていなかったことによるものです。2018年度用の記入要領には、「当該科目が担うディプロマ・ポリシーの到達目標を記入してください。」という文言が入る予定です。

【成績評価方法・基準】

評価方法及び割合（定期試験 %、発表 %、レポート %など）をご記入いただき、それらの評価方法ごとの評価基準（採点基準）を、授業の到達目標との関係でご記入ください。

なお、評価基準に関しては、シラバスには概要のみをご記入いただき、詳細は必要に応じて授業で適宜ご周知ください。

例

定期試験 ** %

到達目標○○に関する知識や到達目標▽▽に関する理解度により評価する。

到達目標△△の理解度と、到達目標□□を論理的に説明できるかを基準とする。

レポート **%

到達目標◇◇を理解した上で、自分がどの立場を取るのかを明確にし、その理由を説得力をもって説明できるかを基準とする。

到達目標◎◎に関する調査結果のまとめの仕上がり度合と、それぞれの評価についてどの程度独自の視点があるかを基準とする。

発表、討論 **%

グループ発表での自分の役割とその達成度、討論では到達目標◎◎を踏まえた上で発言しているかを評価する。

準備学習とグループワークでの到達目標◆◆の態度・意欲を評価する。

授業への参加度 **%

積極的に授業に参加し、到達目標●●ができるようになったかを評価する。

(出欠席の取り扱い)

1. 本学では、出欠席の取扱いは科目ごとに決定し、シラバスや授業を通して受講生に周知していただくことになっています。
2. 出欠席を成績評価に含める場合は、原則として欠席を減点してください。
3. 出席を積極的に評価する場合は、「授業への積極的参加度 **%」「出席及び～ペーパー提出 **%」などの表現を用い、出席のみをもって加点されると受け取られる表現は避けてください。

(共通シラバスについて)

複数のクラスを複数の教員で担当される科目の共通シラバス等、%表示による基準を詳細に設けることが困難な場合でも、以下の例を参考に%で記入してください。

例 平常点(出席、授業内における発表等)20%、試験80%を基本とし、～の到達度によって評価します。ただし、担当教員によって他の課題等を加え、総合評価とする場合があります。

例 具体的な運用は担当教員が決めますが、おおむね授業への積極的な参加度50%、発表・レポート内容50%として総合的に評価します。

◇2017年度からの「授業に関するアンケート」について

授業に関するアンケートが本学で組織的に実施されるようになってほぼ20年が経過しています。その間、様々な試行錯誤が繰り返され、質問内容・形式や実施方法の変更が繰り返されてきました。最近では2013年度のアンケートより、質問を15項目から10項目に減らしたこと、DWCLA10に関する質問が加わったこと、実施科目が任意の2科目から原則全科目で実施となったことなどの改革が行われました。

2016年度から学内の事務組織改革で、教育開発支援センターが教務部内に設置されたことにより、いわゆるFD業務が教務部の所管業務となりました。これを一つの契機として、授業に関するアンケートの内容や集計・分析方法を見直すことになりました。具体的な審議は、教務部長、教育開発支援センター長、全学の11学科の教務主任で構成される教育開発支援センター運営委員会で行われました。

1. 改訂の目的と要点

（具体的な質問）

授業アンケートから得られる各種のデータは、いうまでもなく個々の学生の主観的評価の集積ではありますが、可能な限り焦点を絞った具体的な質問をすることで、集計データをいっそう活用しやすいものとする、というのが改訂の第一の目的です。質問を漠然としたものであれば回答も漠然としたものになってしまいます。アンケート結果の十分な活用が難しいのはこのような点にもあるのではないかとということで、質問内容をよりいっそう具体化することに努めました。

（アンケートの目的の多様化）

授業アンケートは、個々の授業の内容や方法をいっそう改善する目的で導入されました。しかし、ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーの制定が義務化された最近では、授業改善に関する質問に加え、当該科目に関する学修行動や到達目標に関する質問を充実させることで、個々の授業の改善だけではなく、そこから得られるデータを、ディプロマ・ポリシーに掲げる学科の到達目標の達成度の測定にも活用する大学が多くなってきています。そのため、本学の授業アンケートも、授業改善、学修行動、到達目標の3つの区分を設けて質問をすることにしました。勿論、従来からもその3つの内容に関する質問がありましたが、それらを整理し直したということになります。

（アクティブ・ラーニングの推進）

授業アンケートを通して、教員・学生がともにアクティブ・ラーニングの重要性を再確認できるような質問となるよう心がけました。アクティブ・ラーニングの定義は「相互性」です。体を動かすこと、教室を飛び出すことだけがアクティブ・ラーニングではなく、大人数の講義科目であっても、教える側からの一方通行の知識の伝授ではなく、リフレクション（コメント）ペーパーなどを用いた教員・学生間の相互性が確保できるように工夫された授業や、学生同士が学び合える工夫がなされているものはすべてアクティブ・ラーニングが実践されていると言えます。学生の理解度を確認しながら進める授業やフィードバックを丁寧に行うことも立派なアクティブ・ラーニングと言えます。このような意味でのアクティブ・ラーニングのための工夫がどの程度実践されているか、という観点からの質問が多くなっています。

（段階評価と項目選択）

授業アンケートでは、5段階等で回答する段階評価が多くなっていますが、新しい授業アンケートでは授業改善、学修行動、到達目標の各区分に1つずつ項目選択の質問を入れています。例えば、授業改善の区分では、改善してほしいと思う項目を複数選択可で選ぶことができるようにしています。「教員の話し方は聞き取りやすかったですか」というような質問に数少ない質問項目の1つを使ってしまうのはもったいない、というのが大きな理由です。

（アンケート自体が教育活動）

アクティブ・ラーニングに関する質問、学修行動に関する質問、到達目標の達成度に関する自己評価の質問など、アンケートの質問内容や趣旨等を予め学生に周知することで、学生に対して授業に高い意識を持って臨んでほしいというメッセージを発信したいと考えています。貴重な授業時間内に実施していただくものであるため、可能な限り授業アンケートそのものが教育活動の一環となるよう工夫していきたいと考えています。履修要項にも授業アン

ケートについての記載を追加しています。

（自由記述欄廃止）

今一つ存在理由が明確でないと思われる自由記述を廃止し、その代わりに段階評価をしたその理由を任意で記述することができる欄を設けました。

（集計・分析結果の活用）

授業アンケートは貴重な授業時間を使うだけではなく、毎年500万円近くの経費と膨大な事務作業量を伴う事業です。結果の活用は多くの点で個々の教員に任されるものではありませんが、質問意図を可能な限り明らかにし、質問内容をより具体的にすることで、例え複雑なクロス集計をしなくても個々の教員にとって結果がストレートに参考にしやすいものとなるよう心がけています。

その一方で、授業アンケートを個々の授業の改善のためだけではなく、学科のディプロマ・ポリシーに掲げる到達目標の達成度を測るためのエビデンスとして使うことで授業アンケートを実施する意味が増してきます。個々の科目の学修行動と到達目標の達成度に関するデータを学科単位で集計することで、学科全体としての改革のためのデータをを得ることができます。学科ごとの「分析結果」をこのような観点からも行っていただけることを期待しています。これらのデータは認証評価時のディプロマ・ポリシー評価にも活用することができます。

さらには、学科ごとの分析を踏まえて全学的な「総評」もそのような観点から記述されることが期待されます。すなわち、授業の改善状況の総括ではなく、到達目標の達成度を学科間で比較しながら分析し、本学の総合的な教育力そのものが高まっていくような「総評」が期待されます。そして、その「総評」はホームページで公表されるべきものであると考えています。これも教育の「可視化」の一つです。

また、「総評」などの集計・分析結果をもとにして、アクティブ・ラーニング研究会のような場で意見交換をすることも必要だと思われます。

（負担軽減）

2013年度の授業アンケートから原則として全科目でアンケートが実施されています。その一方で除外科目も徐々に増加しています。このような現状から、負担軽減のために2017年度からの授業アンケートは、全科目について実施することを前提としつつも、当該学期に7科目以上授業を担当している専任教員については、6科目以上を実施すればよいこととなりました。それとともに、個人指導を原則とした科目、学外実習科目、集計に間に合わない休暇期間中の集中講義など、実施対象外科目の原則も明確にしました。ただし、集計に間に合わない科目以外は、担当者が希望すれば実施できるようにもしています。

（その他）

- ・ Web での実施も検討しましたが、回答率の低下への懸念、罰則を設けて回答率を高めた場合の混乱、授業中の回答の方がより信憑性があること、などを理由に Web での実施は行わないこととしました。
- ・ 分からないからどちらとも言えない、という回答をなくすために、5段階の評価項目から「どちらとも言えない」を廃止し、「わからない」を加えています。
- ・ 個々の学生の成績を含めたクロス集計のために、記名式にするという考え方もありますが、無記名でのアンケートを継続することにしています。
- ・ 頻繁に質問を変更することの是非は議論のある一方、古い質問をいつまでも繰り返していいものでもありません。授業アンケートにもその時どきの課題を解決するという側面もあります。今回の質問の変更は多岐にわたっていますが、基本的には従来の質問内容をより具体的にするとともに、現在の課題に向き合う内容となっています。

2. 個々の質問内容

2017年度の授業アンケートの質問項目と質問意図等は以下のとおりです。趣旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願いいたします。なお、次のとおり略記させていただきます。

関連する昨年度の質問： (昨 年)
 先生方へのメッセージ： (先生方へ)
 学生の皆さんへのメッセージ： (学 生 へ)
 授業担当者として知りたいことの一例： (知りたい)

《授業実施に関する質問》

1. 授業内容はシラバスに合っていましたか。

(昨 年) 同じ。

(先生方へ) シラバスに沿って授業や成績評価を行っていただきたい。

(学 生 へ) 日常的にシラバスを参照してほしい。

(知りたい) シラバスに沿っているつもりであるが、学生はどのように理解しているか。

2. 受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか。

(昨 年) 授業内容を理解できましたか。

(先生方へ) 受講者が多い場合でも可能な限り理解度を確認する工夫をしていただきたい。

(学 生 へ) 学生もひとつひとつ理解しながら学習を進めてほしい。

(知りたい) 教員側の努力に対する学生の反応。予想との乖離度。改善ための指標。

3. 授業レベルは自分に合っていましたか。

(昨 年) 同じ。

(先生方へ) アンケート結果を次年度の授業準備の参考にしていただきたい。

(知りたい) 学生の理解度を確かめながら授業をした結果に対して、学生はどのように反応しているか。

4. 教員からの一方的な授業ではなく、教員と受講生又は受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか。

(昨 年) なし。

(先生方へ) 受講者が多い場合でも教員と受講生の双方向性などの工夫を可能な限りしていただきたい。アクティブラーニングの観点からの双方向性の工夫やグループワークなどによる授業の工夫をしていただきたい。

(知りたい) 教員側の努力に対する学生の反応。予想との乖離度。改善のための指標。

5. 提出物に対するフィードバック（採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など）は効果的に行われていましたか。

(昨 年) なし。

(先生方へ) 提出物等に対するできるだけ丁寧なフィードバックをしていただきたい。

(学 生 へ) フィードバックの重要性を認識することで、復習等にも力を入れてほしい。

(知りたい) 教員側の努力に対する学生の反応。予想との乖離度。改善のための指標。

6. 言葉による説明だけではなく、受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか。

(昨 年) 授業方法は工夫されていましたか。

(先生方へ) 多様な方法で受講生の理解を促進する工夫をしていただきたい。

(知りたい) 教員側の努力に対する学生の反応。予想との乖離度。改善のための指標。

7. 自主学習を促す工夫がなされていましたか。

(昨 年) なし。

(先生方へ) 発展的自主学習を促していただきたい。

(学 生 へ) 自主的な学習を進めてほしい。

(知りたい) 教員側の努力に対する学生の反応。予想との乖離度。改善のための指標。

8. 工夫してほしいと思ったことを選んでください（複数選択可、なしも可）。

1. 分かりやすいパワーポイントや板書、2. 聞き取りやすい話し方、3. 教科書の活用、4. マナビーの活用、5. 配布資料の活用、6. 私語への対応、7. 受講者への公平性、8. その他

(昨 年) 教員の話しは聞き取りやすかったですか。授業は集中して学べる雰囲気でしたか。

(先生方へ) 授業改善のための気付きとして結果を参考にしていただきたい。

(知りたい) 自分では気が付いていない課題等。

《学修行動に関する質問》

9. この授業の予習、復習、自主学習に1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。

※学内外を問わず授業に間接的に関係のある学習を含む。ただし、授業時間は除く。

(昨 年) 同じ。

(先生方へ) 授業外での適切な学習時間を確保するように指導していただきたい。

(学 生 へ) 十分な授業外学習を行ってほしい。

(知りたい) 授業外学習時間を知りたい。

10. あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか。

(昨 年) 授業に意欲的に取り組みましたか。

(先生方へ) 受講者が多い場合でもコメント(質問)ペーパーを活用するなど、学生が意見や質問を出しやすい環境をつくっていただきたい。

(学 生 へ) 意見を述べたり、質問したりして授業に積極的に参加してほしい。オフィスアワー等も活用してほしい。

11. あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習をさらに深めたいですか。

(昨 年) 授業を通じて知的好奇心が刺激されましたか。

(先生方へ) 興味やモチベーションが高まるように授業をしていただきたい。

(知りたい) 興味を持った学生の度合い。

12. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか(複数選択可)。

1. 授業内容に興味・関心があった、2. 授業方法に興味・関心があった、3. 成績評価方法・基準に興味・関心があった、4. 卒業研究・卒業論文に必須の内容だから、5. 先輩や友人等の勧め、6.DWCLA10の力がつきそうと思った、7. 卒業のための必修科目だから、8. 免許・資格の取得に必要なから、9. 英語で実施されているから、10. その他

(昨 年) なし。

(知りたい) 科目選択動機を知りたい。

《到達目標に関する質問》

13. 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか。

(昨 年) なし。

(先生方へ) 到達目標を達成させるコーチ役を十分に果たしていただきたい。

(学 生 へ) 自分の努力が基本であることを自覚してほしい。

(知りたい) 教員側の努力に対する学生の反応。予想との乖離度。改善のための指標。

14. あなたは到達目標を達成できたと思いますか。

(昨 年) なし。

(先生方へ) 学科として達成度の測定に関する一つのエビデンスとしても活用していただきたい。

(学 生 へ) 自己評価できるように積極的に学習を進めて欲しい。

(知りたい) 学生はどのような自己評価をしているか。

15. DWCLA10の内、この授業の履修を通してその獲得や向上に役立ったと感じられるものをすべて選んでください(複数選択可、なしも可)。

1. 分析力、2. 思考力、3. 創造力、4. プレゼンテーション力、5. コミュニケーション力、6. リーダーシップ、7. 思いやる力、8. 変化対応力、9. 自己管理能力、10. 自己実現力

(昨 年) 同じ。

(先生方へ) このような基礎的・汎用的能力の重要性を十分に認識して授業を進めていただきたい。

(学 生 へ) このような基礎的・汎用的能力の重要性を認識し、獲得に向けた努力をしてほしい。そのためにも授業に積極的に臨んでほしい。

(知りたい) シラバスに自ら記載した項目との一致や不一致の度合いなど。

◇ FD に関する本学ホームページ紹介

教育開発支援センターで実施している FD 事業に関する多様な情報を、ホームページで公開しています。今年度から FD 事業を教育開発支援センターが引き継いだこともあり、本学教職員がより探しやすく見やすくなるようページの構成を若干変更しています。

1. 教職員のアクセス方法と掲載内容（認証制限ページ以外）

教育開発支援センターのページに入る方法は次のとおりです。

- ①まず、ホームページ右上の「教職員」をクリックし、教職員のページに入ります。
- ②教職員のページの左側のバナー「教育開発支援センター」をクリックします。この時点では認証制限ページに入る必要はありません。
- ③これで、教育開発支援センターのページが開きました。

教育開発支援センターのページには、[授業アンケート・教員コメント](#)、[アクティブ・ラーニング研究会](#)、[FD 講習会](#)など、[FD 広報誌](#)、[FD 関連サイト](#)、[クリッカー](#) の各項目があり、それぞれのページに入っていくことができるようになっています。

以下、それぞれのページをご案内します。

[授業アンケート・教員コメント](#)

- 実施要項 ○○年度○学期
 - ・教員用授業アンケート実施要項を掲載しています。
 - ・現在は実施要項を掲載しているだけですが、今後は授業アンケートの目的、集計・分析・公表方法なども掲載していきたいと考えています。
- アンケート様式
 - ・マークシートのアンケート用紙を PDF でそのまま掲載しています。
 - ・今後は各アンケートの質問項目それぞれの趣旨や質問意図などを掲載する予定です。
- 依頼文書
 - ・『授業アンケート実施結果の送付及び教員コメントの提出依頼について』の文書を掲載しています。
- 授業アンケート結果に対する教員コメント
 - ・『授業アンケート結果に対する教員コメント』記入用紙を掲載しています。ダウンロードしてご利用ください。
- 実施結果ページ（※学内アクセスのみ）
 - ・学期ごとの実施結果報告書が掲載されています。学内からのアクセスに限定されていますが、学生にも実施結果報告書を公開しています。
- ○○年度○学期実施結果報告書
 - ・冊子体で配布済みの実施結果報告書が PDF で掲載されています。
- 総評
 - ・教育開発支援センター長（以前は教育・研究推進センター所長）による授業アンケート実施結果全体の分析が掲載されています。
 - ・今後は、この総評を詳しく記述し、よりいっそう活用できるものとしていきます。
- 学科等別授業評価報告書
 - ・学科等ごとの授業評価報告を掲載しています。
 - ・今後は、学科等ごとの科目全体についての報告というスタイルを引き継ぎつつも、授業改善、学修行動、達成度評価という授業アンケートの項目に沿って記載するような形式に変更することを検討しています。特に、ディプロマ・ポリシーに掲げた到達目標の達成度に関する分析が必要となるものと思われます。
- 教員別アンケート結果・コメント
 - ・専任教員ごとに、科目ごとのアンケート結果と、担当科目を総合したコメントを掲載しています。嘱託講師については、アンケート結果のみを掲載しています。
 - ・科目ごとのアンケート結果には、質問項目ごとの評点分布、評点平均値、レーダーチャート等が記載されて

います。

- ・担当科目を総合したコメントは、授業アンケート結果について、今後の改善について、その他の3項目に分けて記載されています。今後は、学科ごとの分析がしやすくなるよう、授業改善、学修行動、達成度評価などの項目に分けて記載するような変更を検討します。

☞ アクティブ・ラーニング研究会

2014年度の秋から年間2～3回、全学教授会終了後などに開催しているアクティブ・ラーニング研究会の案内をしています。アクティブ・ラーニング研究会は、授業で実践しておられるアクティブ・ラーニングを報告・紹介していただくもので、最近では毎回100名を超える教員が参加して、自身の授業の参考にさせていただいています。ここでは今後の開催予定と過去の開催分の案内をしています。

→ 過去の開催分はこちら

- ・現在のところ過去の開催分の案内ポスターの掲載に留まっていますが、今後は、案内ポスター以外にも何らかの情報などを掲載する予定です。
- ・アクティブ・ラーニング研究会で配布されたパワーポイント等の資料と当日の参加者のアンケートの集約は、今年度から、教職員（認証）ページに掲載されています。

☞ FD 講習会など

例年秋に講師を招いて本学教職員のために開催しているFD講習会の案内を掲載しています。

その他、全国で頻繁に開催されているFDやアクティブ・ラーニングなどの講習会やセミナーの案内は、都度Eメールで教職員にご案内しています。これらの講習会やセミナーについては、教育開発支援センターで3段階のカテゴリーに分類してご案内しています。3段階とは、①学科から最低何名かは必ず参加すべきもの、②多数参加してほしいために交通費等を本学負担としているもの、③紹介のみに留めるもの、となっています。

☞ FD 広報誌

2008年以降、毎年3月に発行し本学教職員に配布しているFD広報誌「FDレポート」を、創刊号からPDFで掲載しています。

「FDレポート」は、本学で1年間に実施された全学的なFDの取り組みや学部学科でのFDの取り組みを紹介した記録誌です。

☞ FD 関連サイト

FD関連諸団体のホームページへのリンクを貼っています。現在は、次の外部サイトへのリンクを掲載しています。

- 「文部科学省 審議会別諮問・答申等一覧」
- 「同志社大学 学習支援・教育開発センター」
- 「大学コンソーシアム京都」
- 「関西地区FD連絡協議会」
- 「私立大学情報教育協会－JUCE」
- 「地域科学研究会 高等教育情報センター（KKJ）」

☞ クリッカー

各キャンパスのヘルプデスクには、各100台のクリッカーが用意されています。貸出方法や利用方法を掲載していますので、利用に際してはこちらのページをご一読いただき、ヘルプデスクでご相談ください。

2. 教職員のアクセス方法と掲載内容（認証制限ページ）

専任教職員にのみ公開する内容は、[専任教職員専用（認証制限ページ）]内の教育開発支援センターのページに掲載されています。このページに現在掲載されている内容は次の3点です。

- 「アクティブ・ラーニング研究会 配布資料」
- 「アクティブ・ラーニング研究会 アンケート実施結果」
- 「FD講習会 アンケート実施結果」

認証制限のある教育開発支援センターのページに入る方法は次のとおりです。

- ①ホームページ右上の「教職員」をクリックし、教職員のページに入ります。
- ②教職員のページの左側のバナー「専任教職員専用」をクリックして、ID とパスワードを入力してください。
- ③専任教職員専用ページの「教育開発支援センター」のボタンをクリックしてください。

「アクティブ・ラーニング研究会 配布資料」

2016年度以降に開催された研究会の当日配布資料を掲載しています。

「アクティブ・ラーニング研究会 アンケート実施結果」

2016年度以降に開催された研究会のアンケート結果を、氏名・職名を伏せて掲載しています。

「FD 講習会 アンケート実施結果」

2015年度以降に開催された講習会のアンケート結果を、氏名・職名を伏せて掲載しています。教授会で配布済みの資料です。

3. 学生のアクセス方法と掲載内容

学生は、「学部学科・大学院」をクリックし、プルダウンで「教育開発支援事業」を選択して、教育開発支援事業のページに入ります。

このページの内容は、「教職員」をクリックして入る認証制限のない教育開発支援センターのページの内容とはほぼ同じですが、授業アンケート実施要項は学生用のものとなっていること、教員コメント記入用紙など学生には関係ないものは掲載されていないこと、FD 関連サイトやクリッカーのページはないこと、が異なっています。

今後とも、学生に対しても本学の FD 活動に関する情報を、よりいっそう分かりやすく伝えられるよう工夫していく予定です。

◆ FD 活動報告（2016年度）◆

1. 本学 FD 事業関係

	内 容
4月	・京田辺ラーニング・コモンズ基本設計のためのアンケート実施 (実施期間：4月13日（水）～5月10日（火）)
5月	・春学期授業アンケート実施案内
6月	・2015年度秋学期成績統計資料配布 ・本学 FD 関連ホームページ改訂
7月	・春学期授業アンケート実施（実施期間：7月4日（月）～7月29日（金）） ・反転授業に関するアンケート実施（実施期間：7月25日（月）～7月31日（日））
9月	・春学期授業アンケート実施結果配付
10月	・春学期授業アンケート 教員コメント・授業評価報告書の提出 ・春学期授業アンケート実施結果公開（本学ホームページ） ・秋学期授業アンケート実施案内 ・FD 講習会 開催（参加者：教員141名、職員5名）
11月	・春学期成績統計資料配布 ・マナビーに関するアンケート実施（実施期間：11月17日（木）～12月8日（木））
12月	・第6回アクティブ・ラーニング研究会 開催（参加者：教員117名、職員4名）
1月	・第7回アクティブ・ラーニング研究会 開催（参加者：教員115名、職員3名） ・秋学期授業アンケート実施（実施期間：2017年1月10日（火）～1月25日（水）） ・授業アンケート（大学院・専攻科）実施（実施期間：2017年1月17日（火）～2月24日（金））
3月	・学芸学部第3回 FD 研究会（学芸学部主催） ・秋学期授業アンケート実施結果配付 ・秋学期授業アンケート 教員コメント・授業評価報告書の提出 ・秋学期授業アンケート実施結果公開（本学ホームページ） ・FD レポート第10号 発行

2. 学外における FD 関連セミナー等案内および参加者一覧

2016年度は、以下のとおり学外で開催された各種 FD 関連セミナー等について教職員に向けて周知を行い、幅広い学部から参加がありました。

	セミナー名・テーマ等	主催	参加者〈敬称略〉
5月	同志社大学ラーニング・コモンズ見学	—	鈴木健司（教務部長） 大西秀之（教育開発支援センター長） 他、職員数名
6月	New Education Expo 2016	New Education Expo 実行委員会	教員、職員
7月	セミナー & ワークショップ2016 ～授業運営・カリキュラムを考える～	朝日新聞社	—
8月	Propell® Teacher Workshop for the TOEIC® Tests (教員向け TOEIC セミナー)	同志社大学	—
	教育改革 FD / ICT 理事長・学長等会議 ～学士課程教育の質的転換に向けた課題と ICT 活用を含む改革方策～	私立大学情報教育協会	西村公雄（生活科学部）
	manaba 関連サービス説明会	株式会社 朝日ネット	職員 1 名
	第85回研究協議会 ～教育推進とスタッフ・ディベロップメント～	近畿地区大学教育研究会	鈴木健司（教務部長） 他、職員 2 名
	高等教育活性化シリーズ326 ～4つのポリシー ブラッシュアップワークショップ2～	地域科学研究会	鈴木健司（教務部長） 木津良一（薬学部） 眞鍋えみ子（看護学部） 小松光代（看護学部） 他、職員 1 名
9月	教育改革 ICT 戦略大会 ～教育の質的転換に向けた内部質保証を考える～	私立大学情報教育協会	西村公雄（生活科学部）
	新任教員 FD 合同研修（プログラム A）	大学コンソーシアム京都	—
	富士ゼロックス文教フェア2016	富士ゼロックス	職員 1 名
11月	大学改革推進フォーラム 第6回シンポジウム ～高大接続システム改革と高等教育の将来像～	大学問題研究所	—
	京都三大学教養教育共同化フォーラム ～今、求められる教養教育－京都からの発信－～	京都三大学教養教育研究・推進機構	—
	manaba ユーザー会	株式会社 朝日ネット	職員 1 名
12月	分野連携グループによるアクティブ・ラーニング対話集会	私立大学情報教育協会	飯田毅（学芸学部）
	高等教育活性化シリーズ338 ～学修アセスメントポリシーの構築と展開～	地域科学研究会	職員 1 名
1月	京都 FDer 塾 × 大学教育パワーアップセミナー合同企画 ～教育の質保証について考える～	大学コンソーシアム京都	—
	武庫川女子大学ラーニング・コモンズ見学	—	職員 3 名
	京都産業大学ラーニング・コモンズ見学	—	鈴木健司（教務部長） 大西秀之（教育開発支援センター長） 他、職員 2 名
2月	大学におけるライティング支援体制づくりを考えるシンポジウム・ワークショップ	関西大学	—
	関西大学・大阪府立大学 AP 合同フォーラム ～学士課程教育における内部質保証システムの構築～	関西大学	職員 1 名
3月	第22回 FD フォーラム ～大学の教育力を発信する～	大学コンソーシアム京都	教員27名、職員 5 名
	新任教員 FD 合同研修（プログラム B）	大学コンソーシアム京都	大西秀之（教育開発支援センター長）

同志社女子大学 教務部教育開発支援センター内規

2016年7月13日
制定

(目的)

第1条 本学の教育の継続的な充実と発展を目的として、同志社女子大学教務部教育開発支援センター(以下、「センター」という。)を設置する。

(業務)

第2条 センターは、前条の目的を達成するために次の業務を行う。

- (1) 教育の組織的改善に関すること。
- (2) 教育の内容及び方法の開発支援に関すること。
- (3) 教育評価に関すること。
- (4) 学修支援に関すること。
- (5) その他必要事項。

(センター長)

第3条 センターに教育開発支援センター長(以下、「センター長」という。)を置く。

- 2 センター長は学長が委嘱し、その任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 3 センター長は、教務部長のもと、センターの業務を統括する。

(運営委員会)

第4条 センターを円滑に運営するために、教育開発支援センター運営委員会(以下、「委員会」という。)を置く。

- 2 委員会は、次の者をもって構成する。

- (1) 教務部長
- (2) センター長
- (3) 教務主任

(事務)

第5条 センターの事務は、教務部教務課が所管する。

(改廃)

第6条 この内規の改廃は、委員会、常任委員会及び評議会の議を経て、学長が決定する。

附則

この内規は、2016年4月1日から施行する。

F D レポート 第10号

2017年 3月 発行
同志社女子大学 教務部 教育開発支援センター
〒610-0395 京都府京田辺市興戸
TEL (0774) 65-8413 FAX (0774) 65-8418
E-mail : kyoiku-t@dwc.doshisha.ac.jp
ホームページ <http://www.dwc.doshisha.ac.jp>

